続「明治 51 年」物語
――大正デモクラシーの自壊――

鈴　木　健　二

＜はじめに＞

「（デモクラシー運動のなかで）孕んだとみえたのは、民主主義の正当な嫡子ではなくて、実は日本の帝国主義の鬼子であった」。信夫清三郎の著『大正政治史』の書き出しである。その胎動は明治維新後 51 年目の 1918 年に大きく脈打つ。本稿は前稿に続いて、ときの主役・田中義一陸軍大将を中心に物語風にまとめた。

第一話　新兵器に群がる「新しい女」

1. 陸海軍の見学に女性たちが殺到

「えっ、本当ですか。ほっ、ほんとうに、いいんですか」

電話口で橋詰良一は素っ頓狂な声を上げた。周りにいた営業局員が一斉に橋詰に注目し、耳を傾けた。電話の相手は、田中義一陸相がじきじきに決断したこと、今後はおそらく許可されることはないだろう等々、もったいぶって話しているようだった。橋詰はこめつきバッタのように何度も頭をさげながら受話器を置くと、営業局内を睥睨して大声で叫んだ。

「許可が出たぞ。砲兵工廠の見学だけでなく、タンクまで見せてくれるそうだ」

タンクと聞いて少なからぬ営業局員が「まさか」という顔をした。先の第一次世界大戦で最新兵器として戦場に登場したと聞いてはいたが、日本ではまだ開発されていなかった。「おもちゃでも見せてくれるのかね」と皮肉を言う営業局員もいた。

1919 年 3 月初め。ここは大阪市東区大川町に建つ大阪毎日新聞社の営業局事業係である。北区堂島に新社屋が建設されることになっていたが移転はずっと後で、社員は手狭で古びた社内で押し合いへし合いして仕事をしていた。だから事業係といっても大所帯の販売部や広告部に圧迫されていて、営業局の隅の大机に電話が置いてあるだけだった。橋詰は一応主任となっているが、名ばかりで部下もほとんどが兼務。事業係から事業部に格上げされ、橋詰が初代部長に就任するのはそれから 1 年後のことである。

しかし、橋詰は社内での粗末な扱いなどほとんど気にしなかった。なにしろ営業の鬼才、桐原捨

三局長の直属として慈善事業からスポーツ振興まで、社の事業関係を一手に切り盛りしていたからである。桐原は「大阪朝日に追いつき、追い越せ」と、さまざまなアイデアを部下に求め、これと思うものは社内の反対を押し切って実行に移した。橋詰も新しい事業を立案しようと、寝ても醒めても知恵を絞っていた。

「婦人社会見学会」も橋詰の発案で、2年半前の1916年10月にスタートさせた。ときに「新しい女」が頻々と叫ばれ、女性の地位向上にともなって主婦も外出することがさほど珍しくなくなっていた。「今日は帝劇、明日は三越」はこのころのはやった言葉である。ショッピングや観劇だけでなく、婦人の知識を高めるためにその機会をもろもろの社会見学に振り向ける。と同時に会員名簿を作って「大阪毎日新聞」の読者層に吸収しようとする発想である。桐原は即座にこれを許可して、宣伝の紙面も割いてくれた。

ところが、出だしは惨憺たるものだった。第1回は大阪中央郵便局と大阪ガス会社の見学を企画したものの、応募者はわずか40人足らず。第2回の大阪造幣局も、第3回の鐘紡紡績会社も、さしたる反響を得られなかった。

橋詰は考えた。自分自身が女性の関心事を主婦的に狭く考えていたのではなかったか、と。橋詰は新聞を一面から最終面まで、最終面から一面まで、繰り返し繰り返し丹念に見ているうちに、ふと投書欄の記事に目が留まった。近く軍隊に入隊する息子を案じる母親からの投書だった。

「うん、これだ」と橋詰は膝を打った。息子や兄弟を兵営生活に送り出す女性にとって、兵舎とはどんなところなのかきっと知りたいに違いない。橋詰は陸軍担当の記者に話したが、気のない返事が返ってきただけ。橋詰は思い切って桐原に上申した。

「婦人たちに兵営生活を理解してもらうことは、一家にとってだけでなく国家にとっても軍にとっても有意義なはずです」

橋詰の熱弁に桐原も心を動かした。

「大阪の第4師団に懇意の将校がいる。相談してみよう」

見学許可は意外に早く下りた。師団司令部だけでなく、連隊と輜重兵大隊の日常生活を見せてくれるというのだ。日程は1917年3月15, 16両日と決まった。

この第6回目の婦人社会見学会は大成功だった。予想を超える300人の応募があり、第1日目の15日には午前7時半から集合場所の第37連隊正門前に華やかな着物姿の婦人たちの列が延々と続いた。一行は12の班に分かれ、連隊の中隊長（大尉）が「本日、婦人分隊長を拝命しました」と、おどけて敬礼しながら、連隊内をくまなく案内してくれた。なかでも1000人を超える兵士の食事を用意する炊事場の忙しいさまには、さすがに婦人たちも目を丸くしていた。

将校集会室で各人持参の弁当を広げて連隊長（大佐）ら連隊幹部と昼食をとったあと、射撃訓練や乗馬演習、さらには野外炊事、テント内露営などの実演を見学した。なかにはテントに入って藁布団に座り、露営の実体験を試みる婦人もいた。

翌16日は第8連隊を訪れ、ここでは兵士への支給品一覧や給料の明細、健康管理、連隊内売店

など兵士の日常生活について詳細な説明が行われた。ほとんどの参加者がはじめて軍隊の内側を探検したような気分になり、充実した2日間に満足して帰宅の途についた。

この成功に気をよくした橋詰は1年後の第16回目も第4師団に頼み込み、今度は砲兵連隊と騎兵連隊を見学させてもらった。当日の4月2、4両日には、砲兵隊の実射訓練、騎兵の優雅な行進、さらには音楽隊の演奏サービスもあって、1000人の参加者は前回以上の満たされた表情だった。

陸軍に負けてはなるものかと、海軍の方から「ウチにも見学に来ませんか」と打診があった。軍艦に乗せてくれるというのだ。海軍が貴族院や衆議院の議員たちを招待したことは過去にあったが、民間一般人の乗船を許すことなど前代未聞である。橋詰は天にも登る気持ちで見学をお願いした。

婦人社会見学会が巡洋艦「吾妻」と「常盤」に試乗したのは1919年1月28日のことである。参加者は在阪の読者だけでなく京都や神戸からもやってきてなんと2000人に膨らんだ。特別の試乗とあって、「大阪毎日新聞」の本山彦一社長も挨拶に訪れた。

「吾妻」も「常盤」も日露戦争に参加した排水量1万トンの1等巡洋艦で、今回は練習艦隊として120人余の海軍少尉候補生を乗せていた。一行は大阪築港の桟橋埠頭に集まり、1000人ずつの二組に分かれて蒸気船に乗り込み巡洋艦に移動した。艦艇に登ると、乗組員が歓呼の声を上げて歓迎し、少尉候補生が隅々まで案内してくれた。艦内ではわざわざ日常生活を再現させようと、ある者は洗濯をし、ある者は旗を縫い、またある者は病人のまねをして横たわるなどして見せてくれた。

午後3時の鐘と同時に、突然に「戦闘準備」のラッパが鳴り響いた。将兵たちは脱兎の勢いでそれぞれの持ち場についた。たちまち軍艦旗は引き下ろされて戦闘旗が掲げられた。舷側のボートは引き上げられ、甲板上の一切が隠された。砲手たちが艦砲に駆け寄って戦闘態勢につく。

再びラッパが高らかに鳴ると「戦闘開始」。砲術長が双眼鏡を手に「敵艦、5000メートル」と叫び、「打ち方はじめ」の号令。と両舷側15ミリ12門と8ミリ14門がいっせいに火蓋を切る。さらに20ミリ4門の巨砲が轟音とともに火柱を吹いて硝煙を上げる。婦人たちはあらかじめ耳に綿を詰めていたが、そのすさまじい音に両耳をふさぎうずくまる者もいた。

かくするうちに左舷中央部に敵弾が落ち、火災が起こったとの想定で本物の火の手が上がる。すぐに兵卒がいくつものホースを引っ張ってきて滝のごとく水を噴射させる。と、今度は前方で敵弾に倒れた負傷者が発生し、これを担架で運んで戦闘治療室に運ぶ。まさに実戦さながらの訓練を披露してくれ、見学の婦人たちはただもう夢中で息を殺して眺めていた。

こうなると陸軍も黙ってはいない。陸相の田中義一のお声がかりで、今まで民間人の入ったことのない大阪砲兵工廠と、新来の最新兵器、タンクの見学が実現する運びとなったのである。

なにしろ門外不出の“戦場の怪物”が見られるのだ。「今後は絶対に許可されない」との前評判もあって見学の申し込みが殺到した。「なぜ女でなければいけないのか」とやっかみの抗議の電話もあって、橋詰は応対に汗だくだくだった。結局、とても1日では収容できず、見学は同年3月28, 29, 31の3日間となり、1500人ずつに制限しなければならなかった。

28日の見学模様を伝える「大阪毎日新聞」29日朝刊に、面白い「注意」書きの囲み記事がある。

同日の集合時間と場所を知らせるとともに、「15歳以下の子どもはイケないのです。丁稚さんでもなんでも男子の同行は謝絶します」と書かれている。おそらく付き添いとか何とかいって一緒にもぐりこもうとした男どもがいたのであろう。見学会の人気がわかるというものである。

婦人社会見学会が見たのは、陸軍が試験的にフランスとイギリスから購入したばかりの本物のタンク2台だった。車輪の代わりに履帯式のキャタピラーが左右に備わり、その上に大きな鉄の箱が乗っかっている。その前方には大砲が鎌首をもたげ、左右には機関銃がついている。なにか恐ろしいものを見る目つきで十重二十重に取り囲む婦人たちを前に、村川補砲兵大尉はタンクに登り、懇切丁寧に新兵器の構造を説明した。

「もともとは農場で自由に動ける自動車として開発されたものです。荒地や塹壕を乗り越えて進むことができ、先の大戦で活躍しました。これからはこの新兵器が戦争の重要なかぎを握るでしょう」。

村川は口にこそしなかったが、陸軍は国産の戦車を開発すべく極秘に巨額の研究費を投じていた。

2.「婦人社会見学会」潜水艦に乗る

婦人社会見学会が次に訪れたのは呉鎮守府所属の潜水艦隊だった。潜水艦そのものは20世紀初頭から戦闘に供されており、第一次世界大戦でドイツのUボートと呼ばれた潜水艦が猛威を振るったことは何度も新聞で報道されていた。しかし、精密機械の詰まった潜水艦を見学できるなどとは一般の人には思ってもみないことだった。しかも、潜水艦に乗せて海の中まで連れていってくれるという。海軍の大サービスに橋詰は狂喜した。橋詰だけでなく大阪毎日新聞社も鼻高々で、おかげで新聞の売り上げも急上昇した。

1919年4月11日の見学当日。第11、第12潜水隊の潜水艦6隻が大阪築港の桟橋南方に停泊し、静かに見学者を待っていた。定員3000名に絞ったもののコネを頼ってもぐりこもうとする者が後を絶たず、結局3500人に膨らんでいた。見学は1回では無理なので正午と午後1時半の2回に分けて実施された。

この日は朝から寒風が吹き荒れ、ときには雷鳴さえ混じっていた。しかし、見学者は悪天候もなんのその、続々と集合所に当てられた築港小学校講堂に集まってきた。まず第12潜水隊司令の益子中佐が誰にでもわかるように潜水艦の仕組みを噛み砕いて説明した。

「潜水艦の内部をご覧になると、機械がいっぱい詰まっていて機械の展覧会を見るような感を持つかもしれませんが、実際はそんなに複雑なものではありません。ようは水中に沈んで潜行し、敵艦に対し水雷を発射するだけです。沈む原理はまず船の底に海水を満たし、水没した後は進行力と潜舵の働きで思うままに沈んでいくのです」。

難しい顔をして耳を傾けていた婦人たちは、ほっと安心したように表情を弛めた。益子は頬笑みながら言葉を続けた。

「しかしながら敵艦に気づかれないようにどれだけ煙を出さないようにするか、水中の走行距離をどこまで長くすることができるか、どこの国も研究に研究を重ねています」。

「さて皆さんが見学する潜水艦は改良C型で、全長142フィート、葉巻のような形をしており、胴の一番太いところが直径13・5フィートです。排水量は水上で290トン、水中で320トン、速度は水上で13ノット、水中で7ノットです」。

予備知識を得た一行は小学校講堂を出て、2列縦隊の長い行列を組んで築港の岸壁に向かった。幸い天気は上がって、海面は穏やかに凪いでいた。女性たちは潜水艦に乗るためにまず、伝馬船に分乗して母艦の「第4呉丸」に移り、そこから母艦に接して停泊している潜水艦隊へ細い板を渡って移動した。

「なんて小さくて狭いんでしょう」

すでに巡洋艦に乗った経験のある婦人たちから驚きの声が上がった。なにしろ艦内ではすれ違うのにも横身にならなければ通れないのだから、こんな環境の中で水中に潜って過ごさなければならない乗組員のストレスも相当のものだろうと心配もした。

彼女たちが最も興味を示したのは、一人ひとり交代でペリスコープを覗いたときだった。べつに特段の景色が映っているわけではなかったのだが、まるで別の世界でも見たかのような印象を抱いたようだった。

潜水艦に乗って水中に潜る見学者は15人だけに選別された。うらやましそうに伝馬船に乗って岸壁に帰っていく大勢の婦人たちとは反対に、幸運をつかんだラッキー・レディは、もうすっかり興奮していた。

15人は益子司令とともに艦内に入ると、すぐにマストは下ろされ、ハッチも閉められた。司令塔に立った艦長の「前進スロー」の命令で潜水艦はゆっくりと母艦を離れた。狭い艦内で身を縮めて息を殺していた婦人たちは、極度の興奮と恐怖の混じった顔で艦長の一挙手一投足を見つめていた。

艦長が「潜行準備」と命ずると、操縦室の乗組員の手がスイッチを上げ下げし、そのたびに紫色の閃光が薄暗い艦内でぱっぱっと輝く。3度目の命令「メインタンク注水」で艦の底のバラストタンクに異様な音が響き、海水が注ぎ込まれた。前部と後部で深度計をにらんでいた担当員が「降下1度、2度、3度」と逐一声を上げる。「深度13」の報告があると、艦長は「オモ舵いっぱい」と叫んだ。

このとき潜水艦は完全に水中に沈み、ペリスコープの先頭を海面に出しただけ。司令塔の天井の孔から仰ぐと、翠玉の砕けたような波が頭の上を洗っていた。婦人たちは自分たちがなんの道具も着けないで水中にいるのが不思議のような気がした。艦内の空気が薄くなってしまうのではないかと、心配げに呼吸を小さくした。

「大丈夫ですよ。そんなに緊張なさらないで」

と益子中佐はニコニコしながら一行に声をかけた。

艦長が「ヨーソーロー」と声を張り上げて繰り返す。「どんな意味なのでしょうか」と婦人たちが小さな声で益子に尋ねると、「『好う候』という意味で、そのまま順調に、とでもいいますか。数

百年前から船頭が使っている言葉です」と益子はやさしく説明した。

なんとなくロマンチックな気分に浸る中で、潜水艦はどんどん沈み、やがて28フィートの水深に達した。艦長の命令とともに、今度は潜水艦が浮上を始め、1時間の水中旅行はあっという間に過ぎていった。

かくして「婦人社会見学会」は陸海軍の協力で1919年11月14日の第29回には近畿大演習を、17日には航空隊のアクロバットを見学して、すっかり軍隊づいていった。至れり尽くせりのサービスに大喜びしていた婦人たちは、やがて知らず知らずのうちに軍隊ひいきになっていた。

いったい、どうして軍部は一新聞社の主催にかくもサービスをしたのだろうか。橋詰は「なーに、企画がよかったからさ」と、あまり深く考えなかった。しかし、営業局長の桐原には、軍部の思惑がなんとなくわかる気がした。

理由は二つある。第一は世界的な軍縮のムードである。第一次世界大戦で疲弊した欧州諸国だけでなく、世界が同時不況に見舞われ、不要不急な軍事支出への風当たりは強くなりつつあった。日本も戦中の好景気から一転して戦後不況に陥っていたから、生活難に苦しむ国民のなかには軍人に白い目を向ける者も少なくなかった。

「10年前までは尊敬も受け大威張りだった軍人はいまや一種の寄生虫のように見られるようになった」

とまで報道されるようになっていたのである。

こうした軍縮ムードとは逆に、陸海軍はともに軍備の拡張に必死だった。陸軍は師団増設と航空隊の創設を願い、海軍は戦艦・巡洋艦各8隻の大艦隊建設計画を立てていた。軍事技術は急速に進んでいたので、少なくとも装備の近代化はなにがなんでもやり遂げたい。そのためには国民へのPRが不可欠である。その意味で、大阪毎日新聞社は格好の場を提供してくれたのである。タンクを見せたのも、潜水艦に乗せたのも、装備近代化の必要を印象づけるためだった。

第二は国家総動員体制への準備である。第一次世界大戦はまさに国家の総力戦であった。将兵だけが戦うのではなく、銃後の国民すべてが戦時体制に駆り立てられた。陸相の田中義一だけでなく、陸海軍幹部は誰もが来るべき次の大戦に備えてその準備の必要を痛感していた。そのために女性の理解を得ることはもっとも大切なことである。「婦人社会見学会」は、軍部にとってまさにおあつらえむきの企画だったのである。

もちろん、これは結果論で、橋詰は軍部のPRの片棒を担ぐことになろうなどとは、思ってもみなかったに違いない。

「『お母さま学校』の校長だとか、『婆さま女学生』の学監だとか冷やかされたが、夫人の社会教育機関として激賞されたことは満足の限りです」

と、橋詰は自分の役割があくまでも社会事業の一助であると確信している。

大阪毎日新聞社社長の本山は1926年6月18日に開かれた「婦人社会見学会」第100回記念大会で

「日本の婦人は古くから家庭にこもりがちで、広く知識を社会に求めようとしなかった。この会も10 年前に事業を始めたときはわずか 40 人足らずで、前途多難が予測された。しかし、関係者の一心不乱の努力で、いまや 10 万人の会員に膨らんだ。婦人界覚醒の反映として欣快に堪えない」
と報告して、胸をそらせた。確かに橋詰をはじめとする関係者の努力は並大抵のものではなかったろう。

しかし、見学の対象が軍部に偏重していったこと、少なくともそのことで婦人社会見学会が人気を博したことだけは確かである。結果論ではあるが、「婦人社会見学会」は田中の目指す国家総動員体制への準備に大いに役立ったことは否めない。

3. 良妻賢母から「新しい女」へ

「新しい女」を語るとき、平塚らいてうと青鞜社を抜きにしては語れない。が、「新しい女」を世間にクローズアップさせたのは、発行部数の上昇気流にあった新聞であり雑誌だった。よかれ悪しかれ新聞・雑誌が囃し立てなければ、らいてうも青鞜社もこれほど注目されることはなかった。女性を主役とする事件がことさらスキャンダラスに報じられ、これが「新しい女」をいやがうえでも喧伝させたのだった。

青鞜社については後で触れるとして、まず新聞に現れた「新しい女」を拾ってみよう。

「新しい女」という言葉は、坪内逍遥の講演「近世劇に見えたる新しき女」が発端である。逍遥は 1910 年 7 月に東京、神戸、大阪、京都で早稲田大学の校外教育として同講演を行った。その模様は「大阪朝日新聞」と「大阪毎日新聞」に連載され、後に『所謂新シイ女』と題した単行本（精美堂）にもなった。

逍遥は 19 世紀末から欧州の舞台で演じられた近代劇のヒロインを例にして、男性中心の古い因習社会から自己を解放し、自立的に生きていこうとする女性を「新しき女」と呼んだ。逍遥は「新しき女」を全面的に受け入れたのではなく「彼女らは模範ではなく、見本である」と限定している。しかし、そうした女性の誕生は「自然の趨勢」であり、現下の日本にも現れつつあると語った。

「新しい女」がヘンリー・ジェイムズの小説に描かれた「ニュー・ウーマン」の訳語であるとするならば、逍遥よりもかなり早い時期に「新婦人」として日本に紹介されている。1888 年に東京の新婦人社から出版された雑誌『日本新婦人』がその一例である。しかし、イプセン作「人形の家」の女主人公ノラや、ズーダーマンの「故郷」のマグダらを取り上げて、「ニュー・ウーマン」を「婦人」とはせずに「女」としたところが、さすが逍遥である。

逍遥は文芸協会をつくって精力的に演劇活動を続け、1911 年には私財を投じて自宅に作った私的劇場で「人形の家」を上演した。演出は文芸協会幹事の島村抱月、主役のノラは松井須磨子だった。「人形の家」は帝国劇場にもかかり、爆発的な人気を博した。島村・松井コンビによるズーダーマンの「故郷」も翌年に公演され、爾来、「新しい女」の活字が新聞に、雑誌に頻繁に登場するようになる。

まず新聞。「東京朝日新聞」が1911年5月18日から「新しき女」と題した連載を始める。同紙は冒頭にいう、「ノラのごとき『覚醒したる婦人』は、ともすればわが現代の社会にも見受けられるようになった」と。翌年5月には「読売新聞」が「新しい女」の、7月には「国民新聞」が「所謂新しい女」の、10月には「東京日日新聞」が「新しがる女」の、それぞれ続き物を開始した。

雑誌も負けてはいない。『新潮』が1912年9月に、『太陽』が翌年6月に、『中央公論』が同年7月に、「新しい女」あるいは「婦人問題」と題した特集を組み、識者の投稿を集めた。まさに「新しい女」のオンパレードだった。

新聞・雑誌の「新しい女」の取り上げ方は、その時代的背景を掘り下げて紹介するというより、非難あるいは嘲笑するものがほとんどだった。当時の日本社会がいかに男尊女卑で、家父長主義、良妻賢母主義であったかを知ることができる。その槍玉に上がったのが、らいてうを中心とする青鞜社だった。

平塚らいてうは青鞜社を立ち上げる前から新聞・雑誌から「叩かれる女」だった。そもそもらいてうを“有名”にしたのは「東京朝日新聞」に連載された小説『煤煙』である。同小説は夏目漱石の弟子、森田草平がらいてうとの関係を暴露した私小説だった。

らいてうの戸籍名は明(はる)。1886年に父･定二郎､母･光沢(つや)の三女として東京に生まれた。ただし一番上の姉は早世しているので、実質的には次女である。定二郎は紀州の武家出身で、会計検査院次長にまで登りつめた。らいてうは本郷区曙町（現在の文京区駒込2丁目）の600坪もある大邸宅で、「蝶よ花よ」と育てられた。

こう書くと、いかにも平塚家が上流階級だったのように聞こえるが、必ずしもそうではない。定二郎は陸軍の施設「偕行社」の給仕時代に学んだドイツ語を唯一の財産に這い上がった努力家で、大邸宅といっても当時は茶畑の中に立つ辺鄙な一軒家に過ぎなかった。

ただ定二郎は姉・孝を“後取り娘”として厳しくしつける一方で、らいてうにはかなり自由を認めて奔放に育てた。東京女子師範学校付属高女を卒業すると、本人のたっての希望を入れて、創立間もない日本女子大学校への進学を許した。らいてうは身長145センチの華奢な体つきだが、目鼻立ちの整ったかなりの美形で、当時としては最高の教育を受けたインテリ女性だった。その彼女が両親を苦悶のどん底に突き落とす事件を起こす。

大学を卒業したらいてうは英語学校へ通うかたわら、女流文学者育成を標榜する文学サークルに出入りした。そこでらいてうは東京帝国大学出の森田と知り合う。二人は文学論を戦わせるうちに意気投合し、らいてうは森田と家出をする。1908年3月のことで、二人は栃木県奥塩原で捜索中の警察に保護される。世にいう深窓令嬢の“情死未遂事件”である。事件によってらいてうと平塚家は新聞の非難にさらされた。

この事件で森田は中学校の英語教師を罷免された。森田は「生計の手段を失った」ことを口実に、らいてうからの手紙を下敷きにして小説『煤煙』を「東京朝日新聞」に連載した。連載を斡旋したのは漱石である。同紙が大々的に宣伝したことから事件は全国に知れ渡り、らいてうは世間のかま

びすしい声にもみくちゃにされる。しかし、日本女子大学校の同窓会から除名されるなどの逆境に耐え、らいてうはやがて女性解放運動の旗手として立ち上がる。それが1911年6月の青鞜社創設だった。

ついでにいうと、自らのスキャンダルを売り物に新進作家として売り出した森田は『煤煙』の続編『自叙伝』を、やはり「東京朝日新聞」に連載した。しかし、小説の評価をめぐって社内で激論が闘わされ、漱石に文芸欄の一切を任せていた主筆・池辺三山が責任を取って退社し、『自叙伝』も途中で連載中止となった。『煤煙』はその後の朝日新聞社お家騒動の引き金ともなったのである。

雑誌『青鞜』は「女性ばかりの文芸誌」として発刊されたが、9月発売の創刊号から「新しい女」の雑誌として世間の耳目を集めた。巻頭を飾った与謝野晶子の詩や、らいてうの創刊の辞が、明らかに男性社会への挑戦を明示していたからである。

晶子はいう、「山の動く日来る。かく云えども人われを信ぜじ。……人よ、ああ、唯これを信ぜよ。すべて眠りし女今ぞ目覚めて動くなる」。

そしてらいてうもいう、「元始、女性は実に太陽であった。……私どもは隠されてしまった我が太陽をいまや取り戻さねばならぬ。……私は半途にして斃るとも……『女性よ、進め、進め』と最後の息は叫ぶであろう」。

『青鞜』は、らいてうの言葉を借りれば、「予期以上の愚劣な、そして醜悪な侮辱と、嘲笑と、悪罵と、非難と誤解」を社会から浴びた。少し後のことだが、らいてうはこんなひどい目にもあっている。

ある日、電車の満座の中で、突然に中年の男性に面罵された。そして「おまえたち新しい女にはこれしかない」といきなり顔にツバを吐きかけられたのである。

その一方で、全国に配送された『青鞜』は、矛盾を感じながらも因習に耐えてきた日本中の女性の鬱積を爆発させ、青鞜社には購読の申し込みが殺到した。「2、3号も出れば見っけもの」と文壇に冷ややかに迎えられた『青鞜』だったが、ときの「新しい女」ブームに乗って順調に滑り出していった。

青鞜社は同人らによる“五色の酒”や“吉原登楼”事件、らいてう自身の“若い燕”との同棲など、さまざまな話題をまきながらも、女性解放に向かって一歩一歩進んでいった。大正時代初めは、「新しい女」がまだ大目に見られるときだったのだろう。

しかし雑誌『青鞜』の高揚は、そう長くは続かなかった。その主張が女権伸張から家制度への批判に発展するにつれて、男性社会は猛然と青鞜社の攻撃を展開する。天皇を頂点とする家父長主義が当時の「国体」であってみれば、家制度への疑問は「国体」への批判をはらんでいたからである。「種族保存の必要の前に女の全生涯は犠牲にせられるべきものなのか、生殖事業のほかにして女のなすべき事業はないのであろうか、結婚は婦人にとって唯一絶対の生活の門戸で、妻たり、母たることのみが婦人の天職の総てであろうか、……愛なくして結婚し、自己の生活の保証を得んがために、終世ひとりの男子に下婢として、売春婦として侍しているような妻の数は今日どれほどあるか知れないでしょう」

「世の婦人たちへ」と題したらいてうの文章が『青鞜』（1913年4月号）に載ると、らいてうは警視庁から呼び出され、「日本婦人の在来の美徳を乱す」と厳重注意を受けた。らいてうの処女評論集『丸窓より』（東雲堂刊）は「家族制度破壊と風俗壊乱」で発禁処分となった。「困った女の問題」とした内務省警保局長の談話までが新聞に掲載された。

創刊以来の同人が一人去り二人さって、発刊を続ける重荷がらいてうの肩にずっしりと乗った。疲れたらいてうは1914年11月、伊藤野枝に『青鞜』を譲り、“若い燕”と呼ばれた5歳年下の画学生・奥村博史と東京から去っていった。

『青鞜』を引き継いだ野枝だったが、生活苦とスキャンダルの挟み撃ちにあって、ついに『青鞜』は1916年2月号をもって立ち消えになった。野枝がアナキスト、大杉栄のもとに走り、関東大震災の混乱の中で憲兵大尉甘粕正彦に大杉とともに扼殺されたのはそれから7年後のことである。

『青鞜』を譲ったらいてうは、市川房江らと「新婦人協会」を立ち上げ、消費者組合「我等の家」を設立して社会運動を続けた。が、もはや軍靴の轟く昭和は彼女の活動を評価する時代ではなくなっていた。らいてうは1941年に二人の子どもをもうけた奥村博史と正式に結婚して奥村姓になった。そしてウーマン・リブの華やかなりし1971年に、85歳でこの世を去った。

4. スキャンダル報道と身の上相談

「婦人のための日刊新聞が誕生したよ！東洋初、東洋初だよ！」

「読売新聞」の売り子が威勢よく鈴を鳴らして、路地から路地へと駆け抜けていった。1914年3月25日、東京府下でのことである。

長屋のおかみさんが飛び出して奪うように無料紙を受け取ると、1面トップを飾る増ページの特大社告がその目に染みた。

社告には「今日わが新聞社会中、婦人に対する唯一の味方なり」との口上が掲げられ、4月3日から婦人欄を常時1ページ開設すると書かれていた。「よみうり婦人付録」と名づけた新紙面では、羽仁吉一が監督を、小橋三四子が主任を務めるとある。小橋はらいてうの2年先輩で、日本女子大学校の1回生だった。

そのほか社告では与謝野晶子と田村俊が入社すると伝えている。田村は新作『暗き空』を連載執筆する予定で、同作は「新しい女の生活を描写せん」との宣伝文字も踊る。

そして4月3日朝刊は増ページされた9面全面に「よみうり婦人付録」の特集記事が組まれた。トップ記事の「婦人と時勢」はいう、

「妄りに今の婦人を謳歌する積でない。古い思想に媚びる積は尚更ない。……日々に起こり来る、今の家庭の実際生活に於ける幾多の問題に対する事実で間違いのない解決の好適例を示したい」と。

しかし、「唯一の婦人の味方」とする口上を信じた読者は、すぐに落胆することになる。2日後の「よみうり婦人付録」の半分を埋めた「日本の婦人は如何に変わりつつあるか。その如何に変わらんことを希望するか」と題した識者の大論文からして、しかりである。

「昔の婦人は……たいていは堅固な精神を持っていて婦道というものに対しては少しも恥じるところがなかったのです。……今の婦人は自覚自覚としきりに叫んでいますが、その自覚も真の自覚に到達していない。完全な婦道ということを心得ていないのみならず、全てが生かじりで理屈などでは可なりな程度までやる人も、実際は根底がないので手のつけようがない。……婦人は最も犠牲の精神があって欲しいものです」

なんのことはない、「よみうり婦人付録」は「唯一の婦人の味方」宣言とは裏腹に、良妻賢母主義の提灯持ちをしたに過ぎなかった。

同紙は4月26日と30日の紙面で「婦人の身の上相談」欄を開設すると発表した。「一身上の出来事、たとえば、結婚、離婚、家庭の煩い、および精神上の煩悶、婦人の職業につき……ご相談相手となり、及ぶ限りの力をいたしたい」と布告している。しかし、これまた一種の覗き見趣味的相談が多く、回答も当たり障りのないものばかりだった。

たとえば「不品行の夫にも仕えねばならぬか」との相談に、「そういう経験をなさるのは貴女ばかりではありません」。「是が非でも妻は夫の命に服従すべきなのか」との相談に、「まあご辛抱なさいまし。辛抱さえなされば、次第に自由な境遇になれます」といったように、である。

「不貞の兄嫁をどうしよう」とか「悪い男にだまされた」「男に捨てられて」といった覗き見趣味的な相談が目立つため、身の上相談をやめるべしとの投書も寄せられたほどだった。

「婦人公論」（1919年1月号）に身の上相談の担当記者が「婦人自らの訴えに対して、それはご主人が悪いといったところで仕方がない。せいぜい婦人の立場からどうしたらよいかを考えなければならない」と弁明している。それが新聞の限界、というより新聞の本性だった。その本性は、女性のスキャンダラスな事件を大々的に報道することで遺憾なく発揮される。

「新しい女」の生態として、さまざまな話題をまいたのは青鞜社の同人たちだった。まずは岩野泡鳴・清夫妻である。清は青鞜社発足以来の社員で、夫の泡鳴は青鞜社の熱烈なる支持者だった。ところが泡鳴の浮気が原因で清は1915年8月に別居を余儀なくされ、扶養料をめぐる裁判を起こす。浮気相手に夫があったことから姦通騒ぎにもなり、新聞をにぎわせた。らいてうまでが泡鳴を「すべてが独断的で、家庭だとか夫婦だとかを云うことを無視している」と断罪、浮田和民が「性欲上の一種の病人」と評したことから、これも裁判沙汰になり、話題を大きくした。

雑誌『青鞜』を引き継いだ伊藤野枝もマスコミの餌食になった。夫の辻潤の浮気でボロボロになった野枝は1916年4月、大杉栄の元に走る。しかし大杉には妻もあり、青鞜社の社員でもある神近市子を愛人にしていた。その11月、逆上した神近が大杉を刺し、これまた大々的に報道された。大杉は新聞に「一種の一夫多妻主義」と揶揄され、「新しい女」はつまるところ、「日本の国民道徳に対する一大反逆」だと論難された。

そして女性を主人公とする事件が、これでもかこれでもかと新聞紙上を飾るのだ。

主なものだけを拾うと、1917年3月の伯爵令嬢・芳川鎌子（24）の心中事件がある。芳川顕正伯爵の末娘、鎌子がお抱え運転手と千葉県下の鉄道に飛び込み自殺を図ったもので、鎌子は一命を

取り留めたものの運転手は短刀でのどを突き刺して自殺した。鎌子は婿をとって家を継いでおり、芳川家は事件を隠蔽しようとしたが、「東京朝日新聞」のスクープで白日の下にさらされた。

松井須磨子の後追い自殺も、彼女が数々の「新しい女」を舞台で演じてきただけに新聞の格好の材料だった。松井は一度結婚したが別れ、その後、妻ある島村抱月と恋愛関係になり、不倫を続けた。そして1919年1月、2ヶ月前に病死した島村の後を追って首吊り自殺した。享年34歳だった。

1921年10月には伊藤秋燁子（白蓮）の絶縁状が「大阪朝日新聞」「東京朝日新聞」の紙上を飾った。「私は金力をもって女性の人格的尊厳を無視する貴方に永遠の袂別を告げます」とした ためた妻から夫への公開離縁状である。白蓮は華族、柳原家の令嬢で、26歳のとき25歳も年上の炭鉱王・伊藤伝右衛門に請われて再婚した。しかし、10年後に雑誌『解放』の編集者、宮崎竜介（29）と恋に落ち、絶縁状を公開して身を隠した。白蓮は2年後に宮崎と正式に結婚し、1967年、82歳の天寿を全うした。

1923年7月には有島武郎と雑誌記者・波多野秋子の心中事件がある。有島が秋子の夫から姦通で脅されていたためといわれ、有島を惜しむ人から秋子は「魔性の女」だと攻撃された。

大正時代の後半におびただしいスキャンダル報道が排出されたのは、新聞が量的に拡大し、競争が激化したことと無縁ではない。読者が増えれば、新聞は八方美人になりがちで、権力批判を避けるようになる。その結果、性や犯罪報道に力を注ぎ、センセーショナルになっていった。「大阪朝日新聞」と「大阪毎日新聞」が百万部突破を祝ったのは、1924年元旦のことだった。

第二話　「国体」を元気づける「事件」報道

1. 大事件の遠因は田中陸相のお国入り

ここは山口県山口町（現山口市）。ときは1919年4月18日のことである。

町のメインストリートには、約1キロにわたって人垣ができていた。町内の小学生から中学生の学童・学徒が米屋町から八阪神社までびっしり並び、今か今かと南西の湯田中温泉方面に首を伸ばして待っていた。朝早くから並ばせられたので、疲れて座り込む学童もいた。すると、後ろから目を光らせている先生が直ぐに駆け寄ってきて、怒声をあげて子どもを叱り、立ち上がらせた。

ちょうど午前9時ごろ、2騎の騎馬兵が遠くに見え、続いて2台の自動車が現れた。米屋町に近づくと、騎馬兵が止まった。と、車から山口県知事ら県幹部が出てきて、最後に勲章をいっぱいぶら下げた偉そうな軍人が降り立った。軍人はゆっくりと生徒たちのほうに歩き始めた。近づいてくると学校ごとに級長が「敬礼!」と大声を上げ、一斉に挙手の礼を取った。軍人がいかめしい顔で閲兵でもするかのように顔を向ける。引率の各校長が、まるでこめつきバッタのごとく軍人に近づき、それぞれの学校名を報告する。軍人は「ウン、ウン」とうなずきながら、歩を進めていった。

八阪神社前で学童・学徒の列が途切れると、軍人は用意された馬にまたがった。今度は青年団員や在郷軍人約1400余が沿道に整列していた。軍人は馬上から胸をそらして通り過ぎていった。や

がて一行は第42連隊営門に近づき、将校婦人団が出迎えるなかを連隊の閲兵式に臨むべく、営門をくぐって消えた。

軍人の名は陸軍中将、田中義一。半年前に原敬内閣の陸軍大臣に就任した。そのお国入りとなったので、町をあげての歓迎の意を示すため、この日は山口町の小中学校がすべて休校になり、小中学生が大動員された。

並ばされた学生のなかに、中学生にしては少し大人びた男がひとりいた。細身で顔が黄色くむくみ、いかにもうんざりといった目つきで、通り過ぎていく田中をにらんでいた。実際、男のはらわたは煮えくり返っていた。

「なんで一軍人のために全校が休校になるのか。なぜ、朝早くから並んで閲兵の真似ごとなどしなければならないのか」

できれば声をあげて抗議したいと思った。が、男にはそうする勇気もなかったし、そんなことをすれば即刻退校処分を食らうことくらいはわかっていた。

田中は郷里･萩での法要を口実に､妻･すて子と長男･龍夫をつれて4月11日に列車で東京を発ち、1週間の日程で山口県に滞在した。12日朝に山口県内の柳井駅に着いたときから、学童・学徒、青年団、在郷軍人会が総動員され、駅という駅で歓待を受けた。通りかかった町村の小学校講堂では田中の独演会が催され、各地で郡・町村幹部の歓迎会が繰り広げられた。動員された学童・学徒は数千人に及んだ。大臣のお国入りとなれば、どこでも展開される風景だったが、それにしても田中の場合は度が過ぎていた。少なくとも件の男にはそう思えた。

この男が5年後、大日本帝国を震撼させる大事件を起こす。虎の門事件である。男は事件後、東京地裁の予備尋問で反権力的な思想を抱くきっかけが、この閲兵の屈辱であったと告白している。つまりあの大事件の遠因のひとつは田中のお国入りにあったのである。もちろん田中はそのとき、そんなことを知る由もない。きっと得意絶頂のなかで歩を進めていたに違いない。

学生の名は難波大助。地元の私立鴻城中学の5年生で、そのときすでに数え年で20歳だった。本来なら大学に進学してもおかしくない年齢だったが、中学を転校したり退学したりして、ようやく5年生になったばかりだった。

難波家は山口県周防村（現光市）の名家で、父･作之進は県会議員から1920年に衆院議員になっている。代々毛利家に仕えた藩士で、大助の曾祖父・伝兵衛は明治維新の志士として活躍し、明治天皇に拝謁する栄誉にも浴している。いわば尊王主義の見本のような家系だった。

たとえば1918年8月に起きた「白虹事件」のとき、皇室崇拝に凝り固まっている作之進は「大阪朝日新聞」の不買運動を村民に積極的に働きかけた。それを見た大助も友人に同紙の購読を止めるよう勧めているから、当時の大助もかなりの尊王主義に染まっていた。大助の母方の国光家も山口県では3本指に入る大地主である。

しかし､大助の子ども時代は必ずしも幸せでなかったらしい｡父･作之進は二言目には｢倹約､倹約｣と家族に質素な生活を強い、お惣菜が多いといっては母ロクを怒鳴りちらした。長兄・正太郎も次

兄・義人も山口県の名門山口中学から、それぞれ一高・東大、三高・京大へとエリートコースを歩んでいたが、大助は尋常小学校を出ると高等科へ入れさせられた。兄たちの学資の出費で家計も苦しかったのだろうか、父・作之進は大助を商家に奉公に出すもりだった。

兄たちと同じ教育を受けられると思っていた大助はいたく落胆した。なぜ自分だけが差別されるのかわからなかった。ふさぎこむ大助の事情を母から聞いた長兄は父に手紙を書いた。

「大助を中学に入れてやってください。兄二人に学問をさせて大助だけ中学に入れないとしたら、この先、ひねくれてどんな人間になるやもしれません。もし大助を中学に入れないのなら、自分は大学を止めます」

長男にそういわれて父も思い直し、大助の中学進学を許した。しかし、山口中学ではなく、徳山中学を勧めた。山口中学に入るには無理と判断したのか、それはわからない。山口中学にあこがれていた大助にとって、徳山中学の生活はちっとも面白くなく、授業にも熱が入らなかった。そんななかで1917年2月、母ロクが50歳にもならずに心臓病で死んだ。大助17歳のときだった。

父を恐れ、反発していた大助にとって母がすべての支えだった。その母がいなくなった。大助にとって何か心の奥でガラガラと崩れていくような味気なさと淋しさを覚えた。

母の死んだ10日目に大助は東京で働きながら勉強しようと、父に黙って郷里を出奔した。が、すぐに引き戻されて、今度は山口町の私立・鴻城中学に編入させられた。ここでも大助は落ち着かず、数ヶ月で退学し、また東京に出た。しかし、兄に説得されて鴻城中学に復学し、1919年4月に5年生に進級した。田中義一の“閲兵”に遭遇するのはこのときである。

大助は兄のように大学に進みたいと、山口高校や京都の三高を受験したが、ことごとく失敗した。大助は同年9月、鴻城中学を退学して東京に出て、早稲田予備校にはいった。3年後、やっと早稲田第一高等学院に入学できたが、すぐに退学してしまった。そのころの大助は、普選運動や労働組合活動に関心を持ち、高等教育を受ける意欲を失っていた。やがて大助は社会主義に強くひきつけられ、無政府主義からテロリストへと変身していく。

大助が過激思想にのめりこむ直接的な動機は、当局の容赦ない思想弾圧だった。大逆事件や関東大震災当時の甘粕事件、普選運動弾圧などが大助を体制への憤怒に駆り立てた。

なかでも大逆事件の影響が大きかった。1910年に幸徳秋水らが明治天皇の暗殺を企てたとして26人が逮捕され、24人に死刑判決が下った、あの事件である。当局のでっち上げにも等しい「事件」だったのだが、当時は日本中が当局の発表をまともに受けて「主義者」に恐れおののいた。社会主義のみならず社会改革を目指す運動はすべて危険思想とされ、そうした運動家は寄るのも恐ろしい存在と見られるようになった。その10年後、上野の図書館で事件の公判記録を読んだ大助は一大決心をする。

「たった一人の人間を殺そうと企てただけで24人に死刑判決が下るとは。いったい、日本の法律はどうなっているのか。断頭台の露と消えた幸徳氏もさぞ悔しかっただろうが、誰もその悔しさをはらそうとしないのはどういうことか。それなら俺がやってやる」

大助はたまたま同じころ雑誌『改造』に掲載された河上肇の「断片」という随想を読んで、強く心を動かされていた。ちなみに河上も大助の遠縁に当たる。随想はロシア革命がテロリストの行動によって成功したとするもので、大助は自分が日本の革命の口火を切ろうと考えるようになっていった。

2. 全国に広がった大助をめぐる奇妙なうわさ話

大助の家族は、勉強に打ち込まなくなった大助に不安の目を向けるようになった。帰郷したとき、「気分晴らしにしたらどうか」と、父は狩猟を勧めて猟銃を与えた。大助は狩猟をするふりをして、射撃の訓練をし、テロ計画を練った。そして父のステッキ銃を持ち出して 1923 年 12 月、東京に向かった。摂政宮の皇太子裕仁が 27 日に帝国議会の開会式に臨むと知って、その時間と道筋を新聞で調べ皇太子襲撃を決意する。

同日朝、東京駅に降りた大助は、駅近くの中央郵便局に 9 通の手紙を投函した。うち 7 通が新聞社と雑誌社宛で、

「資本家階級の悪逆と搾取と非人道の守護尊天皇一族の存在は、日本社会革命を遂行するに当たって最大の妨害物である。吾人青年共産主義者は死を決して、天皇一族抹殺のために力を尽くす」

とあった。犯行後にその動機が当局によって隠滅されないように先手を打ったのだった。

大助はステッキ銃をレインコートの内側にしのばせ、市電を乗りついで虎の門沿道に立った。オートバイを先頭に御料車が近づくと、大助は前にいた子どもをつきのけ、目の前を通り過ぎる皇太子の車に駆け寄り、ステッキ銃の銃口を窓ガラスに押し付けて引き金を引いた。弾は窓ガラスを突き抜けて天蓋に達し、車内にガラスの破片が散った。しかし、侍従長の入江為守が破片で微傷を負ったが、皇太子に怪我はなかった。

車はいったん停車しかけたが、スピードを上げて現場を離れ、帝国議事堂に向かって走り去った。大助は「革命万歳！」と叫びながら車を追ったが、たちまち警官や群集に捕まって殴る蹴るの暴行を受け、逮捕された。

何事もなかったかのように皇太子は開会式に臨み、帝国議会は歳末のためそのまま休会になった。議場には大助の父・作之進もいた。事件は議員の口から口へとすぐに広がり、作之進も驚愕した。が、まさか犯人が自分の息子であろうとは思うわけもなく、閉会すると東京駅に急いで帰郷の途に着いた。そのことを知ったのは深夜の広島駅で手に入れた新聞号外からだった。作之進は号外を握り締めたまま座席の上によろめき倒れ、そのまま気を失った。

たまたま同乗していた友人に介抱され、意識を回復した作之進は山口県柳井駅で下車し、車を駆って野道を走らせ、周防村の自宅に駆け込んだ。そして正門に青竹を十文字に結んで閉門の形をとり、難波家断絶を宣言すると、小さな部屋に幽居してしまった。

事件は「国賊の一族」すべてに降りかかったばかりか、「国賊の村」全体をも暗雲に包んだ。正月だというのに歌舞音曲が中止され酒宴も禁止されて、誰もがひたすら謹慎して息を詰めた。大助

の通っていた小学校の校長や担当は、職を辞した。

大助は翌1924年11月、刑法第73条に基づく死刑判決を受け、15日に絞首刑が執行された。それから半年後の1925年5月14日、父・作之進は餓死同然にひっそりと息を引き取り、近親者のみで墓に送られた。享年60歳だった。

ところで事件から死刑までの約1年間、当局はさまざまな世論工作をした。そのひとつが大助を狂人に仕立て上げることだった。“天皇の赤子”がこんな事件を起こすなどありえない、あってはならないとの思惑からだった。

「大助は郷里の精神病院を脱出したばかりだった」とのうわさが突然にわいて出た。大助は鴻城中学に編入したばかりのころ、狂人の真似事をしたことがある。

当時、大助は従兄弟と一緒の下宿生活を送っていた。ある日、彼を驚かしてやろうと下宿に戻ると「いま、公園で人を殺してきた」とまじめな顔で告げた。そして突然に「ここに泥棒がいた」といって木刀を振り回した。びっくりした従兄弟ははだしで逃げ出した。

このことが家人に知れて、大助は「あれは冗談だった」と言い訳する機会を失った。当局はこのことをもって大助に精神的異常ありとして東京帝国大学医学部に精神鑑定を依頼した。鑑定は3週間に及んだが、結果は「強迫観念や被害妄想狂の疑いまったくなし」だった。

そんななかで、別の奇妙なうわさが日本中に広がっていた。

「大助は許婚を皇太子に奪われたので復讐した」

という奇想天外なうわさだった。もちろん、こんなうわさが当時の新聞や雑誌に掲載されるはずもない。その片鱗でもうかがわせる記事が出ようものなら、不敬罪でしょっ引かれる時代だった。にもかかわらずうわさは、あっという間に全国に広まっていった。

大助の母方の国光家に婿入りした大塚有章は事件後、大阪に住む銀行員の友人から手紙を受け取った。

「当地のもっぱらの評判によれば、難波君は恋人を強制的に宮女に召し上げられたのをうらんで今度の挙に出たということだが、私にはどうも信じられない。貴兄が帰阪されたら真相が聞けることを期待している」

大塚は「そんな馬鹿な」と気にも留めなかったが、間もなく所用で行った広島で、寄宿舎にいる義妹を訪ねたときも、こんなことを聞かれた。

「難波の大さんが取られちゃったという恋人は親戚の人ちゅうが誰のことかの」

大塚は驚いて義妹にうわさの出所を聞いたが

「誰もが知っちょることだて。寄ると触ると、その恋人が誰かとみんな知りたがっているて」

と、義兄に疑わしい目を向けた。

大塚は早速、博多と金沢にいる友人に手紙を書いて、同様のうわさが流れているか尋ねてみた。返事はどれも肯定的で、なかには「皇太子が外遊中に手をつけたというううわさだ」との新説も添えられてあった。

大塚は戦後に出版した本のなかで、この話を明らかにしている。が、このうわさを書いているのは大塚だけでも、また戦後のことだけでもない。永井荷風は1924年11月16日付の日記に、こう記している。

「大助は社会主義者にあらず。摂政宮演習のとき、某所の旅館にて大助が許婚の女を枕席にはべらせたのを無念に思い、復讐を思い立ちしなりという」

なぜデマ同然のこんなうわさが、まことしやかに全国に広がったのか。大塚は「全国的な組織を動かしうる人々が、計画的に操作してデマを巧妙に流しているに違いない」と分析している。大助を狂人に仕立て上げようとする当局の底意と低通するものがあると見ているのだろう。

いうまでもなく大助は狂人でも、恋人を寝取られた恨みから銃口を皇太子に向けたのではない。彼は完全な確信犯だった。死刑の判決が下ったとき、大助は大声で「日本無産労働者、日本共産党万歳、ロシア社会主義ソビエト共和国万歳、共産党インターナショナル万歳」を三唱した。

裁判のなかで彼は裁判長や検察に向かって、三つの質問をしたともいわれている。

「裁判長も検事も天皇に対して恐れ多い恐れ多いと、まるで天皇を神様のようにいわれるが、本当に天皇は神様のように恐れ多いのか。私にはどうもそのような気持ちがわいてこない。本当にそういう気持ちがわくのか、それを心からお尋ねしたい」

裁判長も検事も黙して答えないので大助は次に質問した。

「しからば天皇は神様ではないが、国家生活をなす上の国の中心的象徴として扇のカナメのごとくこれを認めてその存在を尊敬し一種の有機的機関として肯定するのか」

これにも満場黙して答えない。大助は再度質問した。

「では刑法に不敬罪その他恐るべき刑罰をもってその存在を示している法の偉力に屈してその態度をとっているのか」

これにも答えないので、大助は昂然といい放った。

「われついに勝てり。君らが答え得ないところに自己欺瞞がある。君らは卑怯だっ！」

いささかできすぎた話だが、まったくの作り話とも思えない。しかし、大助は「勝った」のではなかった。大助が断頭台の露と消えた翌年、大助のような“不逞の輩”の非国民を2度と出さないような法律が制定された。日本を暗黒社会に塗りこめた稀代の悪法、治安維持法である。

3. “暗黒社会”を作った田中内閣の責任

治安維持法は、一言でいえば「国体」変革または私有財産否定を目指す団体を弾圧する法律である。こうした目的で組織を作った者、およびその目的を知りながら加わった者は「10年以下の懲役または禁固に処す」とされた。

同法は1928年に田中義一内閣が改悪して取り締まり対象を拡大し、量刑も死刑にまで重くするが、1925年に制定された当初は議会も世論もさほど強くは抵抗しなかった。もちろん総同盟を中心とする労働組合は反対を表明していたし、革新倶楽部のように異議を唱える政党もあった。しか

し、法案に対する衆議院の表決は248対18で圧倒的な支持を得ていたし、貴族院に到っては反対者がわずか1名だった。

それは「国体」変革とか私有財産否定といった思想は、無政府主義や共産主義を指し、大日本帝国国家とは相容れない運動と一般には受け取られていたからである。政府は「国体」とは憲法学上、天皇の主権を意味すると説明していたので、議会も国民もすんなり受け入れたのだろう。もっともこの「国体」が、やがて大化けして、思想だけでなく倫理的・情緒的なものにまで拡張されて国民の自由を完全に逼塞させていくのだが。

では、なぜ大正末期の、この時期に治安維持法が作られたのだろうか。よくいわれるのは、1925年の同じ年に成立した普通選挙法と抱き合わせにした国民に対する“アメとムチ”であるとの説である。議会に大量の無産党員の進出するのを嫌って、治安維持法で予防線を張ったというのだ。あるいは同年1月にソ連との国交が樹立されたので、その影響で国内の共産主義運動が活発化するのを恐れたため、ともいわれている。

しかし、それだけでは説明しきれない何かがあるような気がしてならない。そもそも為政者は新聞雑誌に謳歌された「大正デモクラシー」なるものに、不信の目を向けていた。加えて1923年の関東大震災後に日本社会を覆った殺伐した不穏な空気は、統治者をして極度の居心地の悪さを認識させた。甘粕事件や亀戸事件で、いわゆる「主義者」が虐殺されたことに対する彼らの怨念を、強く警戒もしていた。

だからこそ虎の門事件がことさらに「主義者」の不敬事件として仰々しく喧伝されたのである。はっきりいって大助の行為は個人的なもので、社会主義運動全体の中ではたいした意味を持つものではなかった。それなのに当局はその思想的背景をわざと拡大誇張することで、治安維持法への地ならしをしていった。

この治安維持法が先に述べたように田中内閣によって改悪され、日本をさらなる“暗黒社会”へと突き落としていく。田中は米騒動や関東大震災当時の社会的混乱を目の当たりにして、大衆運動を過剰なほどに恐れた。米騒動のときは参謀本部次長として軍隊出動にかかわり、関東大震災のときは陸相として治安維持に当たった。

もちろん法改悪が田中ひとりの力でできるものではない。しかし、治安維持法制定当時の司法次官であり、社会主義運動を蛇蝎のごとく嫌った鈴木喜三郎を内相に据えたことひとつとっても、田中の思想的立場ははっきりしている。

田中はまた、治安維持法を本格的に出動させた最初の首相でもある。共産党狩りとして有名な1928年の3・15事件である。3月15日払暁に全国1道3府27県で一斉に手入れが行われ、なんと1800人が検挙され、100ヶ所以上が捜索された。もちろん当時、そんなに共産党員がいたわけではなく、実際に検挙者の3分の2はいったん留置されただけで間もなく釈放された。しかし、その数と鳴り物入りの捕り物騒ぎは、世間の耳目を集め、「主義者」に眉をひそめさせるに十分だった。

田中は事件の記事掲載を新聞に許可した4月10日に次のような談話を発表した。

「共産党事件の発生に対し私は国体の精神と君臣の分義とに鑑み実に恐懼置く所を知らない。事件の内容は金甌無欠の国体を根本的に変革して、共産主義社会の実現を期し当面の政策として革命を遂行するにあったのである」

田中は「国体」イデオロギーを振り回して「主義者」を日本的風土にそむく非国民呼ばわりした。思想犯として法的に問うだけでなく、道徳的倫理的な批判の対象として激しく糾弾したのである。

さらに田中は 3・15 事件をきっかけに特高警察を拡充させた。思想犯を取り締まる特別高等警察課は、大逆事件直後の 1911 年に警視庁に初めて設置された。その後、大阪など 10 道府県に広がったが、田中は残りの全県に特高課を作り、思想犯取り締まりをいっそう強化した。そのために 200 万円の追加予算を計上して、内務省警保局の特高部門を拡充するとともに、特高警察官を大増員した。そして 4 月 16 日に再び共産党狩りをして、なんとこの年の検挙者は 3400 人に上った。

田中は世間に共産主義の恐怖をあおりながら、治安維持法の改悪案を第 55 議会に提出した。改悪の第一は「国体変革」の量刑を「10 年以下の懲役もしくは禁固」から「死刑または無期もしくは 5 年以上の懲役もしくは禁固」に大幅に引き上げた。

改悪の第二は「結社の目的遂行の為にする行為」を新設して、法の精神を目的罪から目的遂行罪に拡張した。つまり、改悪案によれば、「目的遂行のため」と当局が判断すれば、どんなささいなことでも法の網をかぶせられる。その結果、あらゆる社会運動の摘発が可能となった。

さすがにこの改悪には与党・政友会からも異論が出て、議会では委員会に付託されたものの審議未了で廃案になった。ところが田中は次の議会を待たずに緊急勅令として閣議決定し、枢密院に送り込んだ。枢密院では侃侃諤諤の議論が展開されたが、田中の根回しが功を奏して辛くも可決をみた。

そして田中は次の第 56 議会で衆議院と貴族院を通過させて法改定を成立させた。法案が衆院議員を通過した 1929 年 3 月 5 日夜、改悪案に反対し続けた元京大講師の無産政党代議士、山本宣治は右翼によって刺殺された。改悪反対の主張を堅持することは、命がけの世の中になっていた。

4. 転んでもタダで起きなかった正力

大助の撃った 1 発の銃弾で、人生を狂わせたのはその家族だけではない。官界での栄達の道を絶たれ、まったく別の人生を歩んだ男がいる。後の「読売新聞」社主、正力松太郎である。

事件が起こったとき、正力は摂政宮を警護する直接的責任者の警視庁警務部長の職にあった。事件によって正力は、警視総監の湯浅倉平とともに官僚としては最も不名誉な懲戒免職となった。

正力は 1885 年 4 月、富山県の高岡市に近い射水郡大門町に生まれた。生家は土建請負業で、まずまずの豊かな家庭だった。正力は 10 人兄弟姉妹の 5 番目の次男坊として、なに不自由なく育った。高岡中学から金沢の四高を経て、東京帝国大学法学部に進学している。ただし柔道に夢中で成績はさっぱり。試験の直前になると友人のノートを借りまくって、なんとか卒業にこぎつけた。

しかし在学中には高等文官試験に通らず、同級生が外務省や内務省に就職するのを横目で見なが

ら、とりあえず内閣統計局に就職した。2年後にやっと高文試験をパスしたものの、28歳の学士サマでは大蔵省などが相手にするはずもない。現実主義の正力は「今にみていろ」と自分にいい聞かせて警視庁に入った。

当時の警視庁はたたき上げが大半で、帝大出の警部は珍しかった。翌年、警視になると署長の現場を巧みにこなして、1919年には刑事課長に昇進している。刑事課長時代には普選要求集会を実力で蹴散らかすなど、蛮勇を振るった。この集会には大助も参加して、あわや警察に逮捕される寸前に追い込まれている。

1921年、正力は早くも警視総監の秘書役的な官房主事に抜擢される。正力の社会運動に対する果敢で緻密な仕事ぶりが評価されたためだった。官房主事は警視総監の懐刀で、特高警察を取り仕切り、政界の裏工作も担当した。米騒動や普選運動など大衆運動の高まるなかで、正力は豊富な機密費を使って徹底的に運動を封じ込める。「主義者」の集団にスパイを送り込み、内部をかき回して撹乱し首謀者を摘発した。そのやり方が余りに強引で暴圧的だったので、運動家からは恐れられ、嫌われた。

ところが正力は1923年9月、山本内閣が誕生すると、「地方官に出たい」と官房主事退任を湯浅総監に申し出た。内相に就任した後藤新平の直接的指揮下に入るのを嫌ったからである。正力は後藤の、とかくうわさの高い“大風呂敷”的性格を警戒した。彼の政界工作に体よく利用されてはたまらないと考えた。また後藤の社会主義運動に対する微温的態度も気に入らなかった。

湯浅は正力の剛腕振りを重宝していたので手放すことを惜しみ、同年10月、警務部長に横滑りさせた。まさかこの異動が役人生活に終止符を打つことになろうとは、正力は想像もしなかったろう。就任して3ヶ月もたたぬうちに虎の門事件が起こったのである。

懲戒免職は翌年1月の皇太子裕仁の婚礼特赦で処分が解かれ、正力の官界復帰が可能となった。しかし、事件が事件だっただけに官界に戻っても先が知れている。正力は新しい人生設計を練っていた。そこへ「新聞経営をやってみないか」という思わぬ話が転がり込んできた。誘ったのは東京証券取引所理事長で貴族院議員の郷誠之助である。

郷は4年前に身売りに出た「読売新聞」と元「東京朝日新聞」編集局長・松山忠二郎との間を取り持った財界人の一人だった。郷は日本工業倶楽部の主要メンバーをまとめて「読売新聞」買収の資金30万円を作り、松山を社長に推した。

発行部数が5万を切って赤字を垂れ流していた「読売新聞」は、松山の努力で13万部にまで伸びた。こうなると古い社屋では手狭なので、松山は思い切って京橋区西紺屋町（現在の中央区銀座三丁目）に土地を求めて鉄筋コンクリート3階建ての新社屋を建てた。ゆくゆくは10階建てにする計画で、松山の絶頂期だった。

ところが東京會舘で落成祝賀パーティを開くその6時間前に関東大震災に見舞われ、新社屋は灰塵と化した。その後は運に見放されたように転げ落ち、「朝日」「毎日」の大阪資本に挟撃されて、再び5万部台に落ち込んだ。逆に借金が雪だるま式に膨らんで、松山にカネを出していた財界人が

音をあげた。

松山に見切りをつけた郷は、今度は正力に目をつけた。「正力の剛腕でなら読売新聞を立て直せるかもしれない」と正力を日本工業倶楽部に呼び出した。

「君もいずれは政界に出るのだろうから、その前に新聞をやってみてはどうか。ちょうど読売が10万円で売りに出ている。なーに、カネは三井や三菱に出させるから心配はいらん」

正力がすっかりその気になったところへ数日後、「あの話はなかったことにしてくれ」と、郷から電話が掛かってきた。郷のところへ駆けつけると、「大阪でアカ新聞を出している男が20万円で読売新聞を買うといっているそうだ。三井も三菱もアカ新聞と競ってまでカネを出す気はないと尻込みしてしまった」と郷は声を落として釈明した。郷は話を打ち切ろうとしたが、今度は正力が納まらない。

「ちょっと待ってください。カネは自分で調達しますから、この話はどうか打ち切らないでください」

「誰に出してもらうのかね」

「それは今、いえません」

「しかし君、10日後までにカネを用意しないと、この話はだめになってしまうのだよ」

10万円といえば、現在のカネにして約3億円である。そんな大金を出してくれるカネヅルをこの男は持っているのかと、郷はいぶかしい顔をした。正力も正直にいえば、あてがあったわけではない。しかし、乗りかかった船だ。いまさらおめおめと降りるわけにはいかないと、正力はかたくなに思い込んだ。

考えあぐねた正力は話を後藤新平に持ち込んだ。実は、正力は免職になってすぐに後藤のところに挨拶に行っていた。後藤も山本内閣の総辞職で内相を退き謹慎の身だったが、正力の来訪を喜んでくれた。後藤は正力が自分を敬遠して官房主事から警務部長に横滑りしたことを知っていた。しかし、その結果が思わぬ懲戒免職につながった。後藤はむしろ正力を気の毒に思って、こういった。

「ここに1万円ある。これをやるから、しばらく洋行でもして遊んでいろ」

正力はせっかくの申し出は遠慮したが、後藤の懐の深さをしみじみ感じた。切羽詰った正力はそのことを思い出していた。

後藤はこれはと思う男なら、それまでのいきさつがどうであれ手を貸す度量を持っている。長岡の温泉に逗留している自分を訪ねてきた正力の窮状を察して、後藤はあっさりと10万円の借金申し込みに応諾した。

「わかった、カネはなんとかしよう。しかし新聞経営は難しいと聞いている。もし失敗したらきれいにカネを捨ててこい。俺にそのカネを返さなくてもいいからな」

そしてこうもいった、

「俺がカネを出したと、他人にはいうなよ」

後藤は東京・麻布の自分の土地を担保にしてカネを作った。そのことを後で知った正力は感激して、後藤の恩を終世忘れなかった。その後、後藤はNHKの前身である東京放送局総裁になるが、

新聞に最初のラジオ版を登場させたのは正力である。他紙がライバル視して無視しようとしたラジオ番組を新聞に紹介したことで、ラジオも普及し、「読売新聞」も急速に発行部数を伸ばした。後藤と正力は不思議な糸で結ばれていた。

それにしても、後藤はなぜ10万円もの大金を出して、正力に賭けたのだろうか。

後藤は海千山千の男で、喧嘩をしながらも後ろで手を握る芸当ができた。しかし、絶対に許せないもののひとつに「大阪朝日新聞」があった。寺内内閣の閣僚時代に、徹底的に叩かれ続けたからだ。「白虹事件」で仕返しをしたが、「大阪朝日新聞」の残党が松山社長の下で「読売新聞」に生き残っているのが癪の種だった。しかも彼らは「読売新聞」を朝日調のリベラルな色彩に染め抜いている。それも後藤の気に食わなかった。

後藤は正力なら彼らをたたき出してくれるだろうと期待したのかもしれない。あるいはそういう黙契があったのかもしれない。それはともかく、実際に正力は彼らを社から一掃してしまった。それは松山の狡猾な戦術の裏をかいた結果だった。

1924年2月25日、正力は郷の立会いのもとに松山と会って譲渡契約を結んだ。ところがその夜、松山が正力の自宅を訪ねてきて意外なことを告げた。

「正力君、明日の新聞は出せるけれど、それ以降は無理だな。社員が君の警察出身を嫌っている。ここに辞表を預かってきた」

見れば宮部敬治編集局長以下、経済部長の丸山幹治、社会部長の千葉亀雄、編集部長の花田大五郎ら幹部職13名の辞表である。

これには正力も驚いた。松山が去ると、なにはともあれ車を走らせて千葉亀雄宅に駆け込んだ。千葉は松山が「時事新報」から引き抜いた男で、丸山ら他の幹部と違って「朝日」と縁がない。正力は朝までかかって千葉を説得して留任を承諾させた。

翌26日、正力が出社すると、次長たちが次々と現れ、辞表を提出した。職場からは「ここはポリの来るところではない。帰れ」と罵声が飛んで、とても新聞作りの雰囲気ではなかった。正力は再び千葉をつかまえて編集局長就任を要請した。千葉は「残ると決めた以上は、何をやるのも同じこと」と、あっさり引き受けた。正力は早速この人事を社内に張り出した。千葉は社内でも人望があったので、局長就任は社内の動揺を最小限に抑える効果を生んだ。

正力に背負い投げを食わされた松山は翌日、憔悴した面持ちで正力に懇請した。

「自分がなだめるから、部長の辞表は撤回させてくれないか」

「それはおかしいですよ。それに私は次長をすべて部長に昇進させるつもりです」

正力は冷たくいい放った。かくて「朝日」の残党はすべて追い出された。後藤の賭けはずばり当たったのである。

第三話　カネ、カネ、カネの民党政治

1. カネの切れ目が総裁の切れ目

「白蛇の夢を見たでよ」

田中義一は東京・麹町の別宅を訪れた友人にその朝見た夢を語った。別宅とは、いうまでもなく妾宅である。本宅は青山にあり、本妻・すて子との間に 1 男 1 女がいたが、このころの田中はほとんど麹町の妾宅で過ごすことが多かった。1924 年春のことである。

余談だが、妾宅の主、ふみ子は田中よりも 30 歳以上も若い。田中が 2 個師団増設運動に失敗して軍務局長を退き、第 2 旅団長として不遇を囲っているとき、たまたま講演で訪れた群馬県藤岡で割烹料理屋の娘・ふみ子を見初めた。その後、陸相に昇進した田中はふみ子の家族を説得して第二夫人に迎えた。田中 55 歳のときである。田中はふみ子との間に 1 男 4 女をもうけている。

田中の語った夢は奇妙な夢だった。ひとりで富士山麓の草原をさまよっていると、忽然と白髪で白ひげの老人が現れ、田中についてくるよう促した。と、小さな洞の前に着くと、老人の姿は煙と消えて、代わって巨大な白蛇が祠の中から出てきた。びっくりした田中はそこで目が覚めた。

件の友人は必ずしも政界に通じているわけではなかったが、政党の大同団結の話が新聞をにぎわし、その首領のひとりに田中が擬せられていることを知っていた。お追従のつもりでこういった。

「閣下、それは霊夢ですな。きっと政党の総裁になられる前兆でしょう」

すると田中はうれしそうに高笑いした。

「オレは今引っ張り凧でのう。アシコからも来い、ココからも来い、と誘われて弱っちょるよ」

あっちからもこっちからも声が掛かっていたかは定かではないが、内争に明け暮れる政友会から秋波が送られていたのは事実である。帝国議会で絶対多数を誇った同党は原敬首相が暗殺されたあと、高橋是清に引き継がれたものの高橋ではまとめきれず、やがて分裂して第 2 党に転落、政権は憲政会に移っていた。

日銀総裁や蔵相を経験した高橋だが、カネ集めが苦手で党員から不満が出ていた。さりとて党幹部も、どんぐりの背比べで誰が総裁についても再分裂は必至の情勢だった。そこで外部から総裁を担ぎ出そうと策士が走り回っていた。伊東巳代治、後藤新平などとともに、田中も次期総裁の有力候補だった。

政界の情報通に松本剛吉という男がいた。警察の巡査上がりだが、山県派官僚の一人、田健治郎の知遇を受けて衆院議員に 4 回当選、1927 年には貴族院議員になった。それなりの経歴の持ち主だが、為政者の間を飛び回って情報を集めるのがメシよりも好きだった。西園寺公望など元老にも信頼されて、その連絡役も演じていた。

田中の名前が政友会総裁候補に上がると、松本は田中をしばしば訪ねてその人物を偵察した。田中は松本の探りにのらりくらりとかわしていたが、ようやく環境が整ったと判断した 1925 年 3 月、松本に政友会入りの決心を伝えた。西園寺らに触れ回って既成事実を作り上げるためでもあった。

松本は尋ねた。

「政治の矢面に立ちますと、相当のカネが必要になります。失礼ながらそのご用意はおありでしょうか」

「ああ、あるわな」

田中がこともなげにいったので、松本は瞠目した。そして今度はその後ろ盾に探りを入れた。田中は明確に答えなかったが松本は

「どうやら三井系と安田系らしい。井上準之助とも関係があるようだ。結構注意深くやっているのだな」

との心証をもった。

松本の心証は外れてはいないが、当たってもいない。確かに三井系は三井系だが、藤田伝三郎や久原房之助らにつながる、いわば長州閥の新興財閥だった。300万円事件で話題を撒いた神戸の金貸し、乾新兵衛も田中の財布の出所に加わる。新興財閥が必ずしも不都合ではないが、急成長する過程ではかなりの無理もしただろう。そうしたことから田中のスポンサーはとかく色眼鏡で見られ、それは田中に終世ついて回った。

たとえば藤田伝三郎である。長州萩の裕福な酒屋の4男坊として1841年に生まれ、高杉晋作の奇兵隊に加わったことで山県有朋、井上馨ら、後の明治政府中枢の知遇を得た。大阪で陸軍に収める軍靴で大儲けをし、さらに西南戦争で政府軍の物資調達を担って巨万の富を稼ぎ、大阪財界の押しも押されぬ大立者となった。山県や井上の覚えがことのほかめでたく、戦争成金でわが世の春を謳歌しているときに起こったのが、贋札事件である。

西南戦争も終わってようやく世の中が落ち着いてきた1877年暮れ、精巧なニセの2円札が関西方面で大量に見つかった。藤田組の元雇い人が

「贋札は藤田が井上馨と共謀してドイツで作らせ、日本に持ち込んだもので、組の倉庫で数万円の偽札の梱包を見た」

と告訴したためである。藤田ら一族は逮捕され3ヶ月間も拘留されたものの、犯罪の立証はできず放免された。一部では薩摩閥の牙城であった警察機構が長州閥の増長に対する仕返しとして仕組んだともいわれたが、真相はわからない。

その後も藤田は鉄道や汽船会社から鉱工業、新聞業にまで手を広げ、羽振りを利かせた。しかし、児島湾干拓事業に失敗してかつての勢いを失い、昭和に入ると金融恐慌で藤田銀行が潰れて藤田組は瓦解した。山県や井上は随分藤田からカネを巻き上げたが、田中はそのおこぼれに預かった程度だったかもしれない。

田中に徹底的に貢いだのは、久原房之助である。久原の父・庄三郎は藤田の次兄で、同じく長州藩の回船問屋で網元の久原家に婿入りした。しかし、商売は思わしくなく、弟の成功で長兄の鹿太郎と一緒に大阪に出て藤田組を支えた。その4男、久原房之助は慶応予科を卒業すると、「商社マンになりたい」といって藤田組には行かず、森村組に入社した。ところがニューヨーク支店に赴任

する直前に藤田組に呼び戻された。当時、藤田組は手を広げすぎて行き詰まり、社運が傾きかけていた。

「親族の会社が潰れるかもしれないときに、ニューヨークに逃げるとはなにごとか」

と久原は井上馨に一喝された。井上はそれほどまでに藤田家に絶大な影響力を持っていた。

渋々海外への雄飛をあきらめた久原は藤田組に入り、秋田県の小坂鉱山に派遣された。小坂鉱山は政府から払い下げられた銀山だったが、金本位制の採用で銀の価格が暴落し、採算が取れなくなっていた。久原は小坂鉱山が銀よりも銅のほうが有望であることに気づき、新しい精錬法を導入して見事に小坂鉱山を立て直した。

自信を持った久原は藤田組を退社、茨城県の日立鉱山をはじめ方々の鉱山を買い集めて久原鉱業を起こした。汽船や商社にまで手を広げ、第一次世界大戦の好況に乗って三井、三菱に迫る大財閥になった。久原が田中に注ぎ込んだカネは数百万円ともいわれている。今のカネにすれば、数百億円であろう。

しかし、ご他聞にもれず戦後の不況で久原財閥は一気に没落、田中が首相になると山口 1 区から衆院選に出て政治家に転向した。1 年生議員にもかかわらず田中が強引に久原を逓信相に引き上げたので、政友会の同僚の不満が爆発、田中内閣の命取りにもなった。

久原の没落で代わって田中の兵站を引き受けたのが鮎川義介である。鮎川も母が井上馨の姪だったこともあって、井上一門に連なる。鮎川の妹は久原に嫁いでいるので、久原の義兄でもある。

鮎川は東京帝国大学機械科を卒業すると、芝浦製作所で工員として働き、米国の鋳物工場でも働いてみっちり技術を習得した。そして 1912 年に藤田家や久原の資金援助を得て鋳物会社（現日立金属）を起こした。創業当時は資金繰りに困り、しばしば藤田、久原両家の助けを借りたが、苦境を乗り越えると破竹の勢いで成長。久原が左前になると今度は久原を助けて久原鉱業を引き取った。鮎川はこれを日本産業（日産）として再建させ、日産自動車も発足させて一大コンツェルンを築いた。

田中の財布は藤田、久原、鮎川と引き継がれ相当に潤ったが、彼らも政商である。それなりの、というよりそれ以上の見返りを田中から得ていたはずで

「田中が政友会に現れて以来、常に金銭がある」

と 1926 年 3 月の帝国議会で攻撃した中野正剛の指摘は正鵠を射ていたといえよう。

2. 常態化する「政治はすべてカネ次第」

その中野が同じ議会でこうも吼えた。

「（田中を）政界に引き出してくる理由は何であるかといえば、田中にはカネの融通がきく。……諸君の前総裁高橋是清君を隠退せしめたることは、高橋氏が 40 万円の手形を支払うことを拒んだからであると（新聞に）書いてある。カネがなければ総裁をおっぽり出す。その次にカネのある総裁を連れてくる」

高橋を「おっぽり出す」との形容はいささか穏当を欠くが、高橋が財産を使い果たして、総裁の

地位を維持できなくなったのは本人も告白している。総裁たるもの、常に自分の金庫にカネを蓄えておいて、党の出費や議員の無心に応じられなければ首のすげ替えは必定だった。「政治はすべてカネ次第」になった理由はいくつもあるが、なによりも選挙にカネがかかるようになったことが大きい。

もっとも、政治にカネがつきまとうのは、なにも近代に入ってからではない。「越後屋、お主も悪やのう」と、代官がほくそ笑んで豪商から賂の金子を受け取るシーンは、時代劇でおなじみである。江戸幕府も諸藩も、その財政はどんぶり勘定で、財務を担当する勘定方も上から要請されれば無理を承知でカネを作らなければならなかった。幕末期に薩摩や長州の下級武士が京都などで茶屋に入り浸って気炎を上げることができたのも、そのどんぶり勘定のおかげだった。

明治政府成立当初は、為政者がそのどんぶり勘定の習性から抜けきれず、国家予算をつかみ取りして安易に費消していた。議会が開設されて予算制度の体裁が一応整うと、宮内省などの予算に隠しガネをつくって、そこから融通していた。

たとえば山県有朋は1898年の第二次内閣のとき、議会対策費として宮内省などから98万円も吐き出させている。当時の予算規模は4億5000万円程度で、宮内省の予算は300万円だった。山県は議員買収費として8万円を当時の自由党の実力者、星亨に渡した。面白いのは残りの90万円の行方が定かでないことで、大半が山県の豪邸建設に使われたのではないかと疑われている。原敬も日記に書いている。

「このカネは単に議会操縦のみに使用したとは信じがたい。山県は清廉潔白を装っているものの、こんな秘事もあるのだ。驚くべきことである」

山県だけでなく、伊藤博文も1900年に立憲政友会を立ち上げる際、天皇の手文庫から2万円を出させた。

20世紀にはいってからも政府は予算書を故意に複雑にして、隠しカネを随所に潜らせた。なかでも陸海軍の機密費は会計検査の目の届かない格好の隠し場所だった。陸海軍が増長するひとつの原因だった。

だから政党政治が確立すると、政権党になれば予算を牛耳り、官職も自由に就け、利権の余得にも預かれたので、どの政党も政権獲得に必死になった。与党になるには議会で多数を握らなければならない。そのためにはどんな手段を使っても選挙を勝ち抜かなければならない。かくて政治の腐敗はとどまるところを知らずに広がっていったのである。

選挙にカネが大盤振る舞いされるようになったのは、大隈内閣のもとで行われた1915年の第12回選挙からである。絶対多数を握っていた政友会を粉砕するために、内相の大浦兼武は買収資金を全国一円にばらまいて徹底的な選挙干渉を行った。その資金は、大浦の親分の山県や井上馨らが業界からかき集めた。

政友会幹部の岡崎邦輔は「このときから党本部が候補者の選挙費を一切支弁するとともに、選挙ブローカーが目立って活動するようになった」と語っている。

彼によれば、それまでも政党本部が候補者に運動資金を援助することがなかったわけではない。が、それは高が知れていた。大隈内閣は候補者を丸抱えすることで政友会の地盤に挑戦した。選挙ブローカーが選挙区に乗り込んで、府県会議員から市町村長・助役、市町村議員、さらには地元有力者にまで満遍なくカネをばらまいて回った。買収は1票3円、激戦区では数10円になったという。

その結果、211議席を誇った政友会は108議席に半減し、与党の立憲同志会が153議席を得て第1党となった。あまりに露骨な選挙違反に大浦は辞職に追い込まれたものの、選挙のインフレはその後の政党指導者を苦しめることになった。

続く1917年の第13回選挙では、原敬率いる政友会は180万円を使ったといわれる。1908年の第10回選挙では西園寺総裁は党本部の経費も含めて18万円が選挙資金だった。10年間で選挙費用は10倍にも膨らんだことになる。

党本部が丸抱えした候補者に渡したカネは、多い者で8万円、少なくても1万円だったという。旧同志会の憲政会総裁になった加藤高明はこの選挙を含めて3回選挙を戦い、やっと政権にたどり着くが、彼の選挙に散じたカネは1000万円に上るといわれている。

犬養毅の参謀、古島一雄が1911年に東京で初陣を飾ったときは、選挙経費わずかに800円だった。補欠選挙で無競争だったので、これは別格としても、1915年まではどの政治家も千円単位の選挙資金だった。

その後に膨張した選挙資金の大半は買収費として選挙ブローカーに流れた。ブローカーは選挙に金儲けの味を覚え、そのうちに選挙のカネを着服して家を建て、妾宅を構える者も出てきた。候補者の側ではドブに捨てるようなものとわかっても、大金を払っても当選を確保しようとする心理状態に追い込まれたのである。

田中内閣のもとで行われた1928年の第16回選挙は、政友会と民政党の天下分け目の戦いとなったため、さらに札束が舞った。学者や新聞は「普通選挙になれば有権者が増えるので選挙は浄化されるはず」といっていたが、むしろ事態は逆で買収と供応は所とどまらずに広がった。政友会の使ったカネは500万円とも800万円ともいわれている。ライバルの民政党は300万円だったので、田中がいかにカネを集め、散じたかがわかろうというものである。

選挙に突入すると、田中は首相官邸に候補者を一人ひとり呼び出して、公認料として一律に1万円を手渡した。田中はまた、子分と思しき候補者には数万円の別封を包んだ。このカネだけで100万円に上った。

こんなエピソードが残っている。

代議士の矢野晋也は選挙資金援助を受けたく、田中首相を訪ねた。めでたく別封をもらい数日後、田中邸に挨拶に行くと、田中はまたカネ包みをくれた。矢野は「いやー、恐れ入りました」とカネを押し頂き、口をぬぐってカネを懐に納め帰った。矢野はすっかり味をしめて、「これならもう一度もらえるかもしれないぞ」ともう一度田中を訪ねた。ところが今度ばかりは田中も覚えていて「おい、おぬしはもうこの間済んだじゃろうが」ととがめた。さすがに心臓の強い矢野も、ほうほうの

ていで退散したという。

「政治はすべてカネ次第」の傾向が顕著になったのは、政友会の場合、田中が総裁になった前後からだと先の岡崎は指摘している。

「近年の政治的疑獄といえば、その全部がこの幹部や総裁を狙う政治資金に関係がある。勢力を張るためには手兵を作らねばならぬ。選挙に巨額の資金を供給してやらねばならぬから、無理な手段でカネを作る。これが判で押したような近年の疑獄の型である」

しかし、岡崎は政友会にも金持ちの道楽的進出が始まり、金力によるいわゆる親分子分が作られ始めたのは、原内閣からだともいっている。明治の元勲・伊藤博文を初代総裁に仰ぎ、名門の公家公爵・西園寺公望を2代目とする政友会総裁を引き継いだ原は、3代目の地位を獲得し、それを維持するために彼なりの苦労を重ねた。際立った経歴も門地もない自分が、どうしたら党員をひきつけることができるか、彼はその術を知っていた。

3. 総理大臣の座をカネで買う

面白い記録が原に宛てた西園寺の手紙や『原敬日記』などに残っている。

帷幄上奏事件で陸軍にいじめられ政権を投げ出した西園寺は、その後の大正政変劇の混乱を目の当たりにして、すっかり政治に嫌気をさしてしまった。そして1913年2月、突然に「政友会総裁を辞めさせていただく」と京都に引っ込み、党本部に出てこなくなった。西園寺のわがままはこれまでもしばしばだったが、いきなり「辞める」といわれて政友会幹部はうろたえた。

西園寺は後継に原を考えていたが、党内には小うるさい原を嫌う勢力が少なくなかった。そこで党則を改正して総裁は西園寺のままとし、とりあえず松田正久と原が総務委員となって、2頭体制で党を維持していくことになった。

松田は自由民権運動以来の政党の指導者で、党長老として原よりもずっと人気があった。しかし、西園寺は松田がずぼらなので警戒し、党の財布は原に預けた。その額はおよそ14万円だった。松田が翌年ガンで亡くなったので、原は西園寺の強い推薦で晴れて総裁に就任した。原が暗殺された8年後、政友会の遺産は、なんと100万円を超えていた。

原は几帳面なうえに質素な男で、私事にはあまりカネを使わなかった。しかし、党員のためにはカネに糸目をつけなかった。なにも用事がないのに議員が原宅を訪ねてくると、原は議員のとりとめのない話を黙って聞いた。そして帰り際に「ほんの少しだが」といって、カネ包みを握らせた。

選挙が近くなると、候補者が1万円要求すれば1万5000円を、2万円欲しいといえば3万円を渡した。原はカネこそが党員を収攬する最大の武器であることを知っていた。にもかかわらず原は100万円もの大金を政友会のために残して逝ったのだから、彼の蓄財能力は相当のものだった。では、どうやってカネを作ったのか。

原のカネ集めは巧妙だった。自らは汚れたカネをつかまず、同僚に鉄道敷設や港湾整備の利権を与えて、それなりの献金を党にさせた。また、カネのある実業家に選挙に立候補するよう勧め、寄

付を募った。船成金の内田信也や小泉策太郎、森恪らが持参金つきで入党したのは、原からの勧誘があったからである。

原は山県や桂が栄誉に恋々とすることに軽蔑のまなざしを向け、自らは極力避けた。“平民宰相”といわれるゆえんである。しかし、同僚が官位や勲章を欲しがるのはやむをえないことと受け入れ、その働きに応じて斡旋をした。こうして原は求心力を高め、3代目総裁の地位を不動のものにしていった。

しかし、誰もが原のまねをできるものではない。それに時代のテンポも速く、利権づくりは総裁の手から力のある党幹部に拡散していった。原の後を継いだ高橋は、私財を投じて彼なりに努力したが、とうとう刀折れ矢尽きてその地位を去った。

その事情は憲政会、後の民政党も同じである。憲政会の初代総裁加藤高明は三菱家の入り婿なので打ち出の小槌を持ったようなものだったが、後継の若槻礼次郎は大蔵官僚上がりで、とても加藤のようにはいかなかった。政友会と枢密院の策謀に苦しめられても、カネを作れないので選挙に打って出ることができず、内閣を投げ出さざるを得なかった。若槻は回顧録にこう書いている。

「露骨にいうと、私はカネのできない総裁であった。これは世間でも、党員などでも、みな認めていた。選挙というものはカネを使わなければならん。カネのない総裁が空威張りして選挙をやって、大みそをつけてはたまらん、というのが私の腹の中であった」

若槻の後に民政党総裁に推された浜口雄幸も官僚出身で、とても政党党首が務まるような財力はなかった。周囲に口説かれると、「私は貧乏で、とても総裁など務まる柄でない」と逃げ回った。しかし、浜口は若槻とひとつだけ違っていた。若槻はいう、「浜口ならばカネのできる総裁であって、その点でも私と浜口は違うのである」。

なにが違うのか。浜口は底流で三菱とつながっていた。

浜口は土佐生まれである。高知市近郊の水口家の3男坊だったが、浜口家の養子となり、その娘と結婚した。浜口家は安芸郡下の豪家で、三菱の岩崎弥太郎も同じ安芸郡から出た。浜口が東京帝国大学に進学したとき、三菱総理事の木村久寿弥太が保証人になった。さらに浜口が高知県から衆院選に立候補したとき、推薦人は弥太郎の従兄弟で三菱の実力者、豊川良平が務めた。

しかも、浜口と高校・大学と一緒で親友の幣原喜重郎も三菱家の婿であり、民政党の長老で三菱家の縁者でもある仙石貢は浜口と同郷で極めて親しかった。

執拗な党幹部の説得に思い余って浜口は親しい民政党代議士、中島左団次を木村のところに相談にやらせた。いざというときにカネの無心ができるかどうかを探らせるためである。木村は即座に「わかった。130万円ほど仙石のところに回しておくので、後でもらいに行け」と兵站を引き受けてくれた。仙石も「腹が決まったのなら、やるがよかろう」と浜口の背を押した。

千石は技術官僚で鉄道局が長く、鉄道技監まで上りつめ、退職後は九州の鉄道会社の社長を務めた。衆院議員になって鉄道院総裁、鉄道相にもなっている。貴族院議員に勅撰されて悠々自適の生活を送っていたが、浜口が総裁になると千石は全財産を投げ出して浜口を支えた。彼が死んだとき、

一生かかって蓄積した500万円の私財はとうになく、家屋敷も銀行の二重担保に入っていて100万円もの借金をしていた。

先走っていうと、政友会の策士に口説かれて田中の後に総裁になった犬養毅は「オレは知ってのとおり貧乏である。もしカネがあれば引き受けてやってもいい」と開き直った。

そもそも犬養は苦労して守り続けてきた国民党を維持できず、革新倶楽部に衣替えして党首の重石から逃れようとした男である。その革新倶楽部の運営も彼の肩に重くのしかかり、政友会に合流させて自らは政界から引退すると表明してしまった。選挙区が引退を許さず、当選を重ねて議員は続けていたが、カネ作りはもうこりごりだった。結局、山本条太郎など党幹部がカネを出すことを約束したので、政友会総裁を引き受けた。

カネがなければ党首になれず、したがって首相になるにはカネが絶対に必要だった。その典型に田中が挙げられたのは、田中のカネにさまざまな醜聞がつきまとったからである。

4. 汚濁にまみれて潰れた田中内閣

田中はカネの集め方もあまり品よくなかったが、使い方も原ほどにはうまくなかった。だから直ぐに新聞にもれて世間の嘲笑の的となった。1928年の総選挙後に臨時議会で演じられた買収騒動などがその好例であろう。

総選挙ではまれにみるカネを使い、鈴木喜三郎内相の陣頭指揮で露骨な選挙干渉を行ったが、政友会はわずか民政党より1議席多いだけの選挙結果に終わった。民政党は当然に勢いを得て、内相弾劾案を衆院に提出して田中内閣を揺さぶった。政友会は猛烈な買収工作で弾劾案をつぶそうと図った。縁故をたどり、人的関係を手繰って、民政党のなかにも手を突っ込んできた。

とくに選挙後の資金繰りに苦しんでいる議員に目をつけて、カネで議員貞操を買い取ろうとした。高い者で20万円、安くても5万円の買収費が積まれた。そのあくどさは直ぐにばれて、民政党は自衛策として所属議員を地域ブロックごとに集めて湯河原や熱海の旅館に缶詰にした。新聞は民政党を「缶詰党」、政友会を「缶切り党」と呼んで、このどたばた劇を面白おかしく報じた。この多数派工作は失敗して結局、鈴木内相は辞職に追い込まれ、田中内閣の評判を落しただけだった。

ところで田中は張作霖爆殺事件の食言で天皇の怒りを買い、内閣の総辞職に追い込まれた。それから半年もたたずに田中は狭心症で他界した。世間では天皇の怒りが田中の命を縮めたともいわれた。それも大きな原因だったかもしれないが、田中はもうひとつの悩みを抱えていた。

汚職である。田健治郎は日記にこう記している。「近頃、朝鮮、鉄道省、賞勲局など疑獄が頻発している。（田中の）急死はその憂慮に基づくものではないか」。

田は警察畑の下級官僚で、縁あって後藤象二郎に気に入られ、逓信相のときにその次官に抜擢された。伊藤博文の勧めで政友会から衆院議員に当選、離党した後は山県有朋の忠実な官僚派として地位を固め、寺内内閣の逓信相にもなった。

田が挙げている朝鮮疑獄とは、朝鮮総督の山梨半造大将にまつわる事件である。山梨は田中と陸

士同期で、爾来の親友である。原内閣で田中が陸相になると、陸軍省次官に就き、田中が退くとその推薦で陸相に昇進した。「親友」というより、田中の「股肱の臣」といったほうがよいかもしれない。

田中が政友会総裁になったとき、その意を受けて政友本党の切り崩しに札束を懐にして走り回った。そして田中が政権を取ると、朝鮮総督の座を射止めた。それだけに山梨の評判はかんばしくなく、「最悪の総督」と酷評されて、京城駅に着任したときには出迎えが極めてわずかだったとの風評も立った。

その山梨が1928年に川崎商事という貿易会社の社長・川崎徳之助から朝鮮・釜山に米豆取引所を設置したいとの要請を受けた。山梨はのこのこ出かけて川崎と会い、秘書を通じて5万円の献金を受けた。翌年に事件が発覚して、川崎と秘書が逮捕され、山梨も収賄で起訴された。川崎と秘書は有罪が確定したが、山梨は5万円の授受は認めたものの、「そんなカネとは知らなかった」といい逃れて結局、無罪となった。

鉄道省の汚職は政友会幹部で田中内閣の鉄道相、小川平吉が起こした事件である。世に「5私鉄疑獄」といわれた。政友会の肝いりで日本中に鉄道が敷かれ、免許の認可が鉄道省に殺到した。その一方で、鉄道を作ったものの採算が取れずに赤字を垂れ流す路線も少なくなかった。

福岡の博多湾鉄道などは新たな路線を申請する一方で、赤字路線を国に買ってくれと虫のいい要請をし、政友会幹部の貴族院議員・富安保太郎を通じて小川に50万円の報酬を約束した。小川は1928年に買収案を閣議決定に持込み、まずは9万5000円を受け取った。小川は同じような収賄を北海道鉄道、伊勢電鉄、東大阪電鉄、奈良電鉄などでも起こし、これが発覚して大疑獄事件となった。

小川は1933年の東京地裁で無罪となったものの、世間のごうごうたる非難を受けて東京控訴審が動き出し、翌年に一転して有罪が下った。小川は控訴したが、1939年の大審院で懲役2年、追徴金19万2000円の罪状が確定した。収監された小川は位階すべてが剥奪され、政治生命を失った。

賞勲局をめぐる不祥事は、いわゆる売勲事件と呼ばれたもので、田中内閣下の賞勲局総裁、天岡直嘉が起こした贈収賄事件である。天岡は桂太郎の女婿で、金遣いが荒く当時、20万円の負債を抱えて破産宣告を受けていた。ところがなぜか債権者との妥協が成立して破産宣告は解消され、田中によって賞勲局総裁に抜擢された。

天岡の秘書に鴨原亮暢というやり手がいた。彼は昭和天皇即位の御大典が近いのに目をつけて、御大典記念章25万個を作って1筒2円で売る計画を立てた。にわか仕立ての「日本勲章株式会社」を設立して、東京や大阪、京都などの貴金属商に「お宅に記念章の販売を請け負わせるから」といってカネを騙し取った。

告発を受けて当局が捜査に乗り出して驚いた。鴨原は天岡と語らって、勲章を欲しがる金持ちを探し出しては叙勲をえさにカネを吐き出させていた。たとえば日魯漁業の社長・堤清六は1万3000円で勲3等を、東京商工会議所会頭の藤田謙一は5000円で同じく勲3等といったように、である。藍綬褒章も売り出されて、収賄額は総額8万円にも上った。

鴨原は逮捕され、天岡も1929年に召喚されて、収賄罪で起訴された。1933年の東京地裁で天岡

は懲役2年、鴨原は同1年の刑を受けた。検察側が刑の軽さに不満をもって控訴し、結局、1935年の大審院で天岡は懲役2年のほかに1万4250円の追徴金が課せられ、鴨原は懲役が1年6ヶ月に延長されて5250円の追徴金も付加された。

どの事件も当局が動く前から新聞をにぎわし、内閣は汚臭にあふれ、田中の任命責任が問われた。天皇はそうした田中の資質に猜疑の目を向けていたに違いない。

田中は首相を辞任した後、一時は再起も考えたが、浜口内閣が田中周辺の汚職摘発に本格的に取り組んだのをみて、政友会総裁の辞任も考えざるを得なくなった。政友会内にも「恐れ多くも天皇のお怒りを受けた総裁をいただいていては、政権獲得もおぼつかない」と田中を引き摺り下ろす工作が進んでいた。

いくらノー天気でも、そんな空気を知らぬわけはない。田中は後釜を狙っていた床次竹二郎を青山の私邸に呼んで「もう引き時じゃろうなあ」と相談した。しかし、床次は「それはまだ早い。被疑者が起訴されるかどうかわからないし、君が責任を取って身を引くのは反対党の思う壺だ。被疑者にとってもどうかと思うのではないか」と忠告した。

すると田中はつと起き上がり、「おぬしがそういってくれると、おらはうれしいぞ」と直立不動の姿勢をとって大声を発した。

それから1週間後、田中は逝った。

第四話　関東軍に爆殺された田中義一

1. 張作霖は田中に命を助けられた？

「貴様は日本人か、中国人か!」

怒気を含んだ大声が総参謀長室の窓ガラスを震わせた。部屋の外にいた副官や参謀たちは、そのあまりに激しい叱責の声に、自分が叱られたかのように体をこわばらせた。ややしばらくたって一人の男が部屋からよろよろと出てきた。奉天省新民府の軍政署長、井戸川辰三陸軍少佐である。よほどこたえたのであろう、その顔は真っ青で、唇がゆがみ、手足がぶるぶる震えていた。

声の主は児玉源太郎総参謀長。ところは中国・奉天の満州派遣軍総司令部でのことである。1905年3月の奉天会戦で勝利を収めた日本軍は北走したロシア軍を追って総司令部を奉天に進めていた。

日本軍は次の合戦に備えて、奉天の西側に位置する遼河流域沿いを占領し、新民府に軍政署を置いた。新民府周辺は湿地帯が多く、農耕にはあまり適していない。そのためか馬賊が跋扈して無法地帯に等しかった。井戸川はその署長に任命され、ロシア軍の残党狩りとスパイ摘発に当たっていた。

遼河流域はもともとロシア勢力下にあったので、ロシア軍の食料・弾薬を運ぶ輸送隊を請け負い、スパイになってロシア軍のために働く馬賊が少なくなかった。なかには日本軍にも情報を流す

二重スパイをして荒稼ぎするものもいた。その一味と疑われて張作霖は日本軍の憲兵隊に捕まってしまった。

「張は一筋縄ではいかぬけしからんヤツです。戦争の始めから部下を使ってわが軍の行動を偵察し、ロシア軍に通報していました。証拠も挙がっていますので銃殺刑にしましょう」

憲兵隊長がいう。井戸川はさっそく尋問しようと張作霖を獄舎から引き出した。

馬賊の親玉と聞いていたので屈強で野卑な男を想像していたが、張作霖は小柄で色白、まるで女性のような優男だった。「これが 200 余の騎馬を持つ男か」と井戸川はいぶかった。しかし、話してみると頭の回転が速く、なかなか狡猾で使えそうな男である。

井戸川は考えた。奉天会戦で日本軍は騎兵をだいぶ消耗してしまった。ここは張作霖を見方につけて今後の戦争に利用したほうがよいかもしれぬ。そこで井戸川は奉天に出向いて張作霖の助命を嘆願したのだが、冒頭に述べたように児玉に一喝されてしまったのである。数奇な運命をたどった張作霖については後で詳述するとして、とえいあえずことの顛末だけを述べることにしよう。

張作霖はもちろん馬賊出身であるが、当時はすでに馬賊から足を洗って清朝に帰順していた。役職は新民府の地方巡警前営馬隊の管帯である。地方巡警前営馬隊とは新民府の長官の下で治安を担当する警察兼軍隊のようなもので、管帯はその隊長である。配下に 250 の騎兵と、ほぼ同数の歩兵がいた。張作霖、28 歳のときである。

もっとも管帯といっても名ばかりで、ほとんど自分で部下を養わなければならない。馬賊時代と同じように勢力範囲内の「保険区」で有力者の警備をしたり、あるいは保険区外に出て収奪をしたりして部隊を維持しなければならなかった。ロシア軍の食料・弾薬を運んだこともあったろうし、日本軍の情報を集めてロシア軍に売り込んでもいたろう。生き残るための術の一つだった。

井戸川はロシアの勢力下にいた張作霖がロシア軍のために仕事をするのはやむをえないことだと思った。日本軍だって馬賊を懐柔してスパイをさせている。張作霖も今後、日本軍の手先にすればよい。そう考えた井戸川は奉天の総司令部に戻り、まず福島安正少将に相談した。井戸川は参謀本部付時代に福島と面識があったし、福島は満州派遣軍の諜報部門を取り仕切っていると聞いていたからである。福島は井戸川の考えに賛意を示したが

「自分には助命の権限はない。児玉総参謀長に頼んでみては」

といった。そこで井戸川は福島に付き添われて総参謀長室に行き、張作霖の助命を嘆願した。

しかし、児玉は井戸川の説明の終わるのを待たないで右手を振り

「張作霖はけしからんヤツだ。あんな男を銃殺しなければ、他の不逞なやからの見せしめにならぬ」

と言下に否定した。井戸川は

「仰せはごもっともですが、ロシア軍の勢力圏内にいたのですから、彼の行動にも斟酌の余地があると思います。彼の一命を助けて、その騎兵力を利用するのが得策と考えます」

と弁明したが、児玉は聞く耳を持たなかった。

よせばよいのに井戸川は次の日も、また次の日も総参謀室に児玉を尋ね、張作霖の助命を繰り返

した。さすがに児玉は井戸川のしつこさに怒りを爆発させ
「早く新民府に帰って、仕事をしろ」
と怒鳴って部屋から追い出した。
　こうなっては張作霖の助命どころではなくなった。総参謀長の譴責を受けたままで任地に戻るわけにはいかない。井戸川はおもいあぐねて児玉の信任厚いとうわされている田中義一中佐に助けを求めた。田中は当時、児玉の下で作戦主任を担当していた。
「児玉閣下に叱られてしまいました。どうか児玉閣下の怒りを解いていただきたい。そしてできるなら、張作霖の助命もかなえてもらえるなら、これ以上ありがたいことはない」
　真っ青になってわなわな振るえ、今にも腹を切りかねない井戸川に心を動かされた田中は
「わかった。うまくいくかどうかわからないが、何とか努力してみよう。明朝にまた来てくれ」
と約束した。田中は直ぐに福島を訪ねて、ことの顛末を確認した。福島は
「私がついていながらこのようになって申し訳ない。できるなら児玉閣下の感情が和らぐように尽力してくれ。張作霖については私も助命したほうがよいと考える」
と付言したので、田中はその足で総参謀長室に行き、井戸川の謹慎状況を説明し、許しを乞うた。
「なに、福島までそういっているのか」
と、児玉は意外そうな顔をした。福島は馬賊に通じていたし、ロシア軍に対抗して馬賊の一部を諜報活動に使っているのを知っていたからである。
「井戸川のヤツ、まるで張作霖を助命しないと騎兵の少ないわが軍が困るみたいなことをいう。そんなことはない。彼ら馬賊はいつ寝返るかわからん連中で、過信は禁物だ。しかも彼らの情報は必ずしも確実とはいえない。今大切なのは軍法の厳粛である。我が軍の利害打算で助命するなど、もってのほかだ。たとえ助命するにしても、心から前非を悔い、将来の忠勤を誓うことがなければならぬ。井戸川は軍政署長ではないか。そんな杜撰な考えで職責が務まるか。だからわしは叱ったのだ」
　張作霖の助命に脈がありそうだなと感じた田中は再び福島を訪ね、福島から直々に児玉を説得するよう促した。福島も責任の一端は自分にもあると思っていたので直接、児玉に請うてなんとか張作霖助命の承認を得ることができた。
　翌日、田中は井戸川を総参謀長室に連れて行った。
「福島将軍の口添えもあるので張作霖の一命はひとまず助けることにした。しかし、張作霖には十二分に訓戒して我が軍のために大いに働くことを誓約させねばならんよ」
児玉は前日とは打って変わって井戸川に温容に言渡した。
　喜び勇んで新民府に戻った井戸川は即日、張作霖を軍法会議に引き出し、死刑を宣告した。そして3日後にふたたび呼び出して
「福島将軍らの助命嘆願で、ひとまず釈放する。今後は日本軍のために働くことを誓約書にして差し出せ」
と命じた。張作霖は涙を流して喜んだ。

「私は生まれてから字を書いたことがありません。しかし、誓書がなくとも身命を献げて日本軍のために働きます」

こうして張作霖と日本軍の因縁は始まった。それだけではない。張作霖は後に自分の助命を田中が斡旋したことを知って

「田中さんのご恩は一生忘れない」

と、日本人の誰彼となく言いふらした。田中は

「張作霖に恩を被せるようなことをしたわけではない。日本と中国にとってよいと考えたから口添えしたまでだ。それに張作霖は義理で動くような男ではない」

と語っている。果たして本当そうであったのかどうか、その後の田中と張作霖の関係を追尾することにしよう。

2. 日本軍に利用され殺された張作霖

張作霖は 1874 年に奉天（現遼寧）省海城県で生まれた。海城県は遼東半島の西の付け根、営口から北東に約 100 キロ上った田舎町である。祖先は河北省で食い詰めて、満州に流れてきたらしい。張作霖が 14 歳のとき、父親が博打のいさかいで殺され、母と親戚に身を寄せて、食うか食わぬかの貧しい子ども時代を送った。そんな少年時代を経た満州の若者が誰でもそうであったように、張作霖も無頼の生活に沈み、やがて匪賊に身を投じた。

張作霖は小柄で、腕力で伸していくには程遠かったが、頭は切れ、機転は利き、呑み込みが早かった。なによりも人をそらさず機微に敏感で、仲間から「万人喜」とのあだ名がついたほどだった。そうした性格にほれ込む土地の有力者もあって、張作霖は馬賊として独り立ちしていく。

馬賊は、盗賊・山賊の、いわゆる単純な匪賊ではない。「保険区」という勢力範囲を持ち、その地区の有力者（スポンサー）から「保険料」を取って地区を守る武装集団「保険隊」である。保険区の外では匪賊と変わらぬ窃盗団にもなるが、馬賊も大所帯になると地域の出入りを押さえて通行税を取ったり、物資の流通に課税したりして勢力の拡大化を図った。ついでにいうと、「緑林」とは馬賊の古称で、美称でもあった。

張作霖は持ち前の機転を十二分に発揮して保険区を広げ、20 世紀初頭には 200 騎からの配下を持つようになった。ちょうどそのころ、満州の長官（盛京将軍）として清朝から奉天に赴任してきた増祺が馬賊の帰順政策を始めた。馬賊を行政府の軍隊に編入し、その力を利用して馬賊・匪賊を討伐しようというのである。張作霖はここでもうまく立ち回って地方巡警前営馬隊の管帯に取り立てられた。その裏にはこんなエピソードがある。

帰順するといっても、馬賊にとっては相手がワナを仕掛けるかもしれないので、おいそれと簡単に乗るわけにはいかない。実際に当局にだまされて武器を取り上げられたうえに、全員射殺された馬賊もあった。

張作霖が考えあぐんでいるときに、たまたま保険区を通ろうとした増祺の夫人たちがいた。張作

霖は直ちにこの行列を抑えた。一行は身ぐるみ剝がされるかと震え上がったが、張作霖は丁重に彼女たちを遇した。そして自分の身の上話を語って、帰順への支援を頼んだ。いかつい男を想像していた夫人は張作霖が女性のように優しいので安心し、その身の上話に同情した。そして夫の増祺への橋渡しをしてくれた。こうして張作霖は立身出世の足がかりをつかんだ。

張作霖は父親がまだ生きているときに、村の私塾に1年ほど通ったことがある。だから自分の名前を書くことや簡単な文章を読むことくらいはできた。しかし、本格的な教育は受けていない。張作霖は自分の欠けているところを補うべく人材を広く集めて、これをよく使った。荒くれ男たちをうまくまとめて、秩序維持に努めたのである。張作霖は単なる馬賊ではなかった。

それ以上に張作霖は混乱の世を行きぬく狡知に長けていた。1911年に辛亥革命が起こり、袁世凱が北京で権力を握ると、張作霖はこれを助けて奉天の陸軍第27師団師団長兼中将に昇進した。袁世凱が死ぬと、今度は満州からその勢力を追い出して奉天省督軍兼省長になった。さらに権謀術数を駆使して東3省（奉天、吉林、黒竜江）の支配者につく。

やがて蔣介石の率いる国民政府軍が北伐を開始すると、これに対抗して張作霖は軍閥の連合「安国軍」を組織してその総司令となった。そして北京に上洛し、自ら陸海軍大元帥を名乗る。1927年、張作霖絶頂のときだった。

しかし、その栄光も長続きはしなかった。結局、北伐を阻止することができず、北京を明け渡さなければならなかった。翌年6月4日、張作霖は列車で奉天に戻る途中、日本の関東軍によって爆殺された。享年54歳だった。

張作霖死去の第一報が届いたとき、当時の首相、田中義一は静養先の伊豆修善寺で食事中だった。田中は思わず手にした箸を投げて「しまった」と叫んだ。この関東軍の謀略がやがて田中の政治生命ばかりでなく命まで奪うのだが、もちろんそのときは謀略の事実まで掴んでいたわけではない。張作霖を通じて日本の満州への影響力を維持しようと考えていた田中にとって、張作霖の死は痛かったのだ。

田中は参謀次長時代、中国の南北政争につけ込んで満蒙独立を画策するなど、武力に頼った強引な側面があった。しかし、シベリア出兵に失敗して原敬内閣の陸相時代にその尻拭いをしてからは、中国政策も強引さが秘め、もっぱら政略によって日本の満蒙への影響力を拡大しようとするスタンスに変わっていた。なかでも田中が執心したのは満州鉄道の支線を張り巡らすことだった。そのためにも田中にとってキーパーソンとなるのは張作霖だった。

田中は首相になると蔣介石とも水面下で取引し、国民政府の中国統一を認知する代わりに張作霖を東3省の主権者として認めさせ、日本の満州における特殊権益を確保しようとした。田中は自分が保証人になることで、蔣と張との間を調整できると確信していた。それは時代がかった発想で、風雲急を告げる中国で通用するはずもなかっただが、田中は自分の力量を過信していた。

田中が張作霖に見切りをつけようとしたときもないではない。しかし、日露戦争の一件以来、田中は張作霖を注視し、なにかと気配りしてきた。原敬内閣の陸相になると、張作霖に本格的にてこ

入れをした。部下の反乱で決定的な窮地の陥ったときも、田中は張作霖に肩入れした。郭松齢事件がそれである。

郭松齢は張作霖の馬賊時代からの部下ではなく、辛亥革命後にその革命軍の中から登用された。北京の陸軍大学出身で戦略に長け、張作霖はその能力にほれ込んで、長男・張学良の教育まで任せたほどだった。しかし、郭松齢は張作霖の古参幹部とそりが合わず 1925 年 10 月、「張作霖の隠居、張学良の擁立」を唱えて反乱を起こした。その勢力は一気に奉天に迫り、張作霖は半狂乱になって自殺を図ろうとしたほどだった。その窮地を救ったのが田中義一である。

当時、田中は陸軍を退役して政友会総裁になっていた。ときの政権は民政党の加藤高明で、外相の幣原喜重郎は反乱に不干渉を主張し、陸相の宇垣一成も干渉には消極的だった。政友会の最高幹部から呼ばれた加藤首相は

「張・郭の争いは、どちらが勝とうがわが国にはなんら関係がない。東 3 省が赤化しても他国のことであるからいたしかたない」

と述べて、田中の激高を買った。田中は

「反逆者に軍が協力するとはなにごとか」

と宇垣の尻を叩き、白川義則関東軍司令官にも連絡を取って干渉を促した。田中と白川は若いときから親交があり、ツーカーの仲だった。白川は日本人居留民と南満州鉄道の保護を名目に、郭松齢の奉天進攻を拒んだ。これで張作霖は息を吹き返し、郭松齢軍を破った。

田中は内閣を組織してからも、張作霖をかばった。たとえば蒋介石の北伐が山東省に及ぶと、日本軍を出兵させてその北上を妨げて張作霖に時間稼ぎを与えた。張作霖の増長に業を煮やし、関東軍が張作霖を引き摺り下ろそうと画策したときも、田中は最後まで首を縦に振らなかった。そのことが結果的に関東軍を怒らせ、謀略に走らせるのだが、田中はあくまで張作霖をコントロールできると確信していた。それだけに張作霖の爆死は田中にとって大打撃だった。

ところで、なぜ田中は「作霖はオラが弟」といってはばからないほどに張作霖を大事にしたのか。田中と張作霖の間柄に、なんらかの不透明な関係がなかったのかどうか。

出世階段を上る過程で張作霖が思い切った袖の下を各方面に配ったであろうことは想像に難くない。中国では「紅包」というが、関東軍司令官や関東庁長官だけでなく、日本国内の政治家にも気配り・目配りしていたともいわれている。少し後のことだが、こんなことがあった。

1935 年の帝国議会で、当時の逓信相、床次竹二郎が「売国奴」呼ばわりされた。床次が張作霖の長男・張学良から 50 万元の政治献金を受けていた、というのである。カネの話は 7 年前の 1928 年 12 月、床次が奉天に張学良を訪ねたときのことだった。

当時、張学良は父・張作霖の後を継いで、満州の支配者になっていた。一方の床次は首相を目指していたが、新党作りが思うようにいかないので、かつて飛び出した政友会にも秋波を送っていた。床次は原敬内閣の内相を務めた実力者だったが、総裁になりそこねて政友会を割り、民政党に入ったり出たりして「政界の夢遊病者」と揶揄された。このときも新党の政治資金が十分に集まらない

ので、持参金をもって政友会に戻ろうと画策していた。床次は張学良にこう語った。

「私が首相になったら日中間の懸案を解決したい。そのためには政友会の総裁選に出馬しなければなりません。しかし、とてもそんな資金はないのです」

張学良は床次に尋ねた。

「私に何かお手伝いさせてくれませんか」

床次は恐縮していった。

「手伝っていただけるなら、大変ありがたいのですが」

「総裁選挙にはいくらくらいかかるのですか」

「まあ2000万元、必要です」

「わかりました。出しましょう」

あっさりと張学良が引き受けたので床次はあわてて言葉を継いだ。

「いえ、いただく必要はありません。貸していただくだけで結構です。返せるときがきたらお返しします」

そして帰り際に

「当座として50万元が必要です」

と無心した。張学良は直ぐに50万元を送った。

2000万元の話はその後、うやむやになった。ところが満州事変のとき、関東軍が押収した張学良の金庫から床次の書いた50万元の領収書が出てきた。

いうまでもなく張学良は父・張作霖のやり方を見て育った。張作霖が勢力を拡大する中で、日本の軍人や政治家に「紅包」を盛大にばらまくのを見ていたのかも知れぬ。その中に田中がいたかどうか、真相は不明である。

3. 天皇に叱られ悶死した田中義一

張作霖爆殺は、関東軍の高級参謀・河本大作大佐などごく一部の陰謀として計画実行された。しかし、村岡長太郎司令官ら関東軍のトップがまったく知らなかったかどうかは定かでない。実際、村岡は張作霖の武装解除が田中の反対でできなくなると、河本の計画とは別に張作霖暗殺を考えていたからだ。張作霖の乗った列車が遭難したと聞いて村岡は「よし!」と一声発したのみだった。思い当たるふしがあったのかも知れぬ。

事件は1928年6月4日早朝に起きた。現場は奉天駅を目前にした南満州鉄道と北寧鉄道のクロスする地点で、ちょうど張作霖の乗った列車が満鉄の陸橋下を通った瞬間に陸橋が爆破され、その瓦礫で車両が押しつぶされた。張作霖はほとんど即死状態だったが、護衛兵がすばやく官邸に運び、奉天軍の幹部はその死をしばらく隠した。関東軍が事件に乗ずるのを封じるためだった。河本が描いた筋書きでは、事件を機に奉天軍との武力衝突を起こし、一気に満州を制圧する計画だった。しかし、幹部はその裏を書いて奉天軍の発砲を禁じ、関東軍に付け入る隙を与えなかった。

現場に爆薬を仕掛けたのは河本が朝鮮から呼び寄せた工兵隊で、指揮したのは現場の守備担当の中隊長、東宮鉄男大尉だった。爆破犯人を国民党の工作員に見せかけるべく、あらかじめ現場に中国人の死体二つを転がしておいたが、そんな偽装は何の役にもたたなかった。現地ではたちまち関東軍の仕業ではとのうわさが広がった。

しかし、遠く離れた日本では政府も陸軍中央もうわさを耳にするだけで、皆目詳細を知ることができなかった。事件を知った田中は5日夜、静養先の伊豆修善寺から汽車で東京に戻った。途中の車中で同行の記者団にこうもらした。

「日本人が関係していることはぜんぜんあるまいと思うが、ただ浪人連中の中にはいろいろやっているものがあり、それがために種々なる風説を生んで困っている」

あるいは田中の心の片隅で、「ひょっとすると」との不安がよぎったのかもしれない。田中は直ぐに情報収集に努めた。

田中の不安をかき立てる凶報が次々と入ってきた。

まず、張作霖の第2子、超学銘の教導役を務めていた貴志弥次郎予備役中将が突然に帰国して、田中に面会を求めた。貴志は田中が第3連隊長時代の直属の部下で、事件直後、現場に急行して独自に調査していた。

「爆薬の量といい質といい、とても少数の中国工作員が持ち運べるものではありません。それに爆破スイッチの電線を敷設した痕跡が認められました」

続いて18日の閣議後、小川平吉鉄道相が田中に耳打ちした。

「未確認情報だが、どうも関東軍が絡んでいるらしい」

田中は白川陸相に調査を命じた。

「わかりました。まさかとは思いますが、私どものほうで明白にしたいと思います」

白川は約束した。その1週間後、陸軍省と参謀本部は河本を東京に呼んで査問会を開いた。しかし、河本は事件の関与を完全に否定し、軍当局もあまり熱心には取調べなかった。白川は7月初め、関東軍は事件と無関係であるとの報告を田中に上げた。

田中はひとまず安心した。が、暗いうわさは内地でもどんどん広がり、そのうちに海外の報道機関がしきりに日本軍の仕業だと報じるようになった。田中は8月5日の張作霖の葬儀に林権助前北京駐在公使を派遣した。林は田中の意を受けて情報収集に努めたが、なにしろ関東軍がかたくなに拒んだので満足のいく成果は得られなかった。それでも林の情報から田中は日本軍人の犯行ではないかとの疑念を一層深めた。

田中は陸軍省、外務省、関東庁の合同調査会を立ち上げるとともに、9月に入って峯幸松憲兵隊司令官を現地に派遣した。峯は長く関東軍憲兵隊司令官を勤めていただけにさすがに調査は行き届いていた。朝鮮に飛んで実行部隊の工作隊も突き止め、これを証拠に河本や東宮をぎりぎり締め上げた。峯は帰国後、直ちに田中に報告した。10月8日のことである。

このとき田中は天皇に随行して陸軍大演習の行われている盛岡にいた。峯が報告書をもって田中

の宿泊先、故原敬の旧別荘に現れたのは午後8時ごろだった。外は土砂降りの雨だった。

「それじゃ、オラはだまされていたのか」

田中は火鉢に火箸を突っ立てて、直ぐに白川陸相を呼んだ。鈴木荘六参謀総長にも伝えた。鳩首会談の結果、とりあえず11月の天皇の即位式典が終わるまで伏せておこうということになった。

2週間後の外務・陸軍・関東省庁の合同調査会でも、関東庁から日本軍の犯行を示唆する報告がなされた。しかし陸軍側は結論の引き延ばしを図った。田中は陸軍側の要望を受け入れた。これが田中の致命的なつまずきとなった。なぜなら陸軍側は事件のもみ消しに急速に傾いていたからだ。

その後、何度も会議がもたれたが、陸軍当局は言を左右にして結論を先延ばしにする。田中の苦境を知った元老の西園寺公望は田中を叱咤激励した。

「もし日本軍人のなしたることならば、断然処罰して綱紀を正さなければならない。そのことが国際社会の信用を維持する唯一の道である。長期的に見れば日中関係でもよい効果を生む。首相が軍出身だから軍部を抑えることができた、政友会という強い政党だから思い切ったことができたと世間は評価するだろう」

そしてこうもいった。

「なるべく早く天皇にはご報告しておいたほうがよい」

しかし田中は対応に苦慮するだけで日延ばしを続けた。天皇の即位式典のことで頭がいっぱいだったこともあるが、一日遅れれば遅れただけ田中の動きを封じる包囲網が構築された。それでも田中は12月24日、思い切って天皇に奏上した。

「張作霖横死事件には遺憾ながら帝国軍人が関与しているようです。目下、鋭意調査を進めていますが、もし事実ならば法に照らして厳然たる処分を行いますので、追って陸相から報告させます」

この奏上は閣議に諮らず、白川陸相、岡田啓介海相にだけ伝えた。この奏上が田中内閣の運命を決めることになる。

年が明けて1929年になっても、田中と陸軍の綱引きが続いた。というより、田中はますます孤立して、身動きが取れなくなっていた。山東出兵の膠着がいっそう田中を苦境に陥れていた。陸軍のもみ消しの動きに呼応した政局、そして宮中側近が連動して田中をがんじがらめに縛っていた。そのことについては後で述べるとして、天皇と田中の対局の場面に話を戻そう。

田中が事件の顛末について2度目に参内したのは事件から1年も過ぎた6月27日のことだった。帝国議会や新聞からやいのやいのとせき立てられたからでもある。田中はすでに陸軍の方針を受け入れて、法に基づく関係者の処分をあきらめていた。

田中の参内に先立つ3ヶ月前の3月27日、白川陸相が天皇に事件の真相と処分の方向について報告していた。

「事件は関東軍高級参謀の河本大佐ら一部の犯行と判明しましたが、これを公表するのは国家に不利益を与えますので、その点を配慮しつつ軍規を正したいと思います」

田中は陸相上奏を受けた形で

「日本軍の犯行であるという証拠が見つからないので、行政処分程度にとどめます」
と報告した。ところが天皇は田中の報告を聞くうちに見る見る顔色を変え、終わると同時に怒りを爆発させた。
「それではこの前の言葉と矛盾するではないか」
田中は恐れおののいて
「そのことについては、いろいろとご説明申し上げます」
というと、天皇は
「説明を聞く必要がない」
と奥へ入ってしまった。

田中は翌日、閣議で天皇に叱られたことを報告した。
「天皇を補佐する宰相がそのように軽々しく扱われてよいものか」
不満が閣僚から噴出した。

そこで閣議は白川陸相を立てて事件の行政処分について再度、報告をさせることにした。白川の上奏に対して天皇は何もいわずに裁可した。天皇が軟化したものと受け取った田中はその午後 1 時半、もう一度参内して天皇との取次ぎを侍従長の鈴木貫太郎に頼んだ。しかし鈴木は
「お取次ぎはしますが、おそらく無駄でしょう」
と冷たく突き放した。天皇の信任を完全に失ったと悟った田中は即座に辞職を決意した。首相官邸に戻った田中は車から降りると、「オラは辞める」と叫ぶのを官邸詰めの記者たちは聞いた。

田中は 7 月 2 日に内閣総辞職した。それから 3 ヶ月もたたない 9 月 29 日、田中は心臓発作で急逝した。もともと田中は狭心症の持病を抱えていたが、あまりに突然のことだったので、死因にさまざまな推測がなされた。妾宅で死んだので腹上死だったのではとの説。そして遺骸ののどに包帯が巻かれていたとの目撃証言が流布されて、自殺だったのではともうわさされた。

4. 田中内閣を潰した陸軍と宮中側近

田中内閣は天皇の一言で倒れた。内閣が天皇の弾劾で崩壊したのは、これが初めてだった。「私もまだ若かった」と後で天皇は述べたというが、それにしても、なぜ天皇はそれほどまでに田中を激しく叱責したのだろうか。それには天皇の田中に対する不満の鬱積があった。人事面でも政策面でも、田中はいとも軽く前言を翻すことがしばしばあったからだ。

田中は政権につくと、閣僚のみならず、政務次官、参与官まで、ほとんどのポストに政友会員を置き、内務省警保局長や警視総監はじめ高級官僚を更迭した。さらには総選挙に備えて知事 34 人、内務部長 38 人、警察部長 44 人など合わせて 110 名余りの地方官僚を異動させた。田中にしてみれば、政権が交代したのだから当然と思ったのだろうが、若い天皇の目には露骨な党派的人事のように映った。決定的だったのは、台湾総督更迭問題だった。

1928 年 5 月のことだ。台湾在中の久邇宮稔彦王が朝鮮人に襲われる事件が起こった。上山満之

進台湾総督は責任を取って直ちに辞表を提出したが、「その儀に及ばず」と辞表は却下された。ところが田中は1ヶ月後、上京した上山に再度辞表の提出を求めた。上山は抵抗したが、無理やり詰め腹を切らせた。

上山更迭の旨を報告すると天皇は「一度辞表を却下したものを、なぜ辞めさせるのか」と聞きとがめた。田中は「上山も長くなりました。そろそろ交代の時期なので」と、いろいろ理由をつけて上山の更迭を強行した。

同じころ、田中は内閣を改造して久原房之助を逓信相に据えた。この人事は政府・与党からも不満が出て、水野錬太郎文相は人事に反対して辞表を出した。閣内不一致を恐れた田中は水野を説得、天皇から留任の「優諚」を受けることで辞表を撤回させた。水野が記者団にこのことをしゃべったため、「一閣僚に優諚とは、稀有のこと」と大騒ぎとなり、水野は記者談話を取り消して結局、辞めた。田中の安易な天皇の「お言葉」利用は宮中の顰蹙を買った。

田中内閣の山東出兵でもつまずいた。とくに1928年4月の第二次出兵では済南で国民政府軍と武力衝突し、田中と蒋介石のパイプもプッツンと切れてしまった。天皇は出兵について、「尼港事件のようにならないか」と心配した。シベリア出兵で日本の居留民が尼港で惨殺された二の舞にならないかと心配したのである。実際、日本人居留民の保護を名目にしながら、逆に山東出兵では日本人の被害をもたらした。「田中は事件がすぐにも収束するといいながら、一向に収まらないではないか。どうも田中は言上に違反が多い」と天皇は不満を漏らした。

2度目の参内のとき、田中が

「事件について政治上、余儀なく行政処分にとどめます。前と異なる奏上になったことを申し訳なく思います。したがって辞表を提出させてください」

といえば、天皇も「政治家としてやむを得まい」として叱ることまではしなかっただろう。しかし、田中は真相を知りながらうその発表をしたいと報告したのである。潔癖な天皇にはそのぬけぬけとした言上が気に入らなかった。

田中の思慮のなさや言葉の軽さも問題だが、牧野伸顕内府ら宮中側近も天皇と田中の間を円滑に取り持とうとする熱意がなく、冷ややかに田中の言動を傍観視した。というより、牧野は貴族院や野党の民政党と連絡を密にして、田中の失脚を根回ししていたふしがある。牧野は明治の元勲、大久保利通の次男である。いわば薩派であった。まだ長派・薩派の派閥争いが政局を動かしていた。

しかし、田中を政権から引き摺り下ろした最大の勢力は田中の出身母体の陸軍である。田中自身は陸軍をコントロールできると過信していたようだが実際は、反長州派の政敵は執拗なまでに田中の失脚を狙っていた。さらには下克上の機運をはらんだ若手中堅幹部は「人事刷新」を合言葉に着々と体制固めをしていた。田中が目をかけて育てた白川陸相や宇垣一成大将らも面従腹背で役に立たなかった。とくに宇垣にいたっては田中の根回しの要請も断って、ただただ冷笑して放置した。

田中は長州出身を最大の武器に出世階段を上ってきたが、彼自身は自分の派閥を固めることにあまり熱心ではなかった。しかし、非長州出身の軍人から見れば、田中の人事はえこひいきに映った。

同郷で陸士同期の山梨半造や若いころから知り合いだった白川陸相を、ことのほか重用したことなどが指弾された。

反田中の急先鋒は薩派の上原勇作元帥だった。彼の周りには佐賀出身の武藤信義大将、村岡長太郎中将、真崎甚三郎中将らが集まり、荒木貞夫中将も上原グループを構成していた。

若手中堅幹部は河本大作など陸士15期から18期の佐官クラスでグループを作り、退役した田中などは眼中にないかのように振舞った。彼らは張作霖事件当時、ほとんどが陸軍省や参謀本部の課長職にあったから、仲間の河本を守るためには陸相を突き上げることも辞さなかった。彼らは上原派と連絡を取りながら、田中を身動きが取れないように陸軍中央を固めていたのである。

だから田中が事件処理で筋を通そうとしても陸軍中央が動くはずもなく、下から突き上げられた白川陸相は辞職を田中にほのめかすまでになっていた。陸相辞任となれば即総辞職である。田中の選択肢はまったくなかった。「オラが大将」は「裸の大将」同然だった。

マスコミ（といっても当時は新聞だが）も田中を孤立無援の状態にさらした。事件当初は「朝日新聞」が爆破事件現場の写真を6月5日の号外で報じた。済南事件の取材を終えたカメラマンがたまたま奉天にいて、生々しい写真を内地に空輸して完全スクープした。さらには奉天駐在の記者が張学良と単独会見して、14日朝刊には張作霖死去を伝えている。

しかし、その後は政府が事件を「満州某重大事件」と呼んで報道管制を敷いたこともあって、新聞の報道もなにか奥歯に物の挟まったような形容に流れていった。すでに新聞社の中にも陸軍記者、海軍記者が次第に発言力を強め、自己規制する傾向も生まれつつあった。それでも遠慮がちながら正鵠を射た記事もあった。

「本件は明々白々に張作霖の爆死事件に関したものであるにかかわらず、ことさらにこれを某重大事件などと唱えられていることは、そのことがすでにわが国に関しなんらか重大な嫌疑のようにも解せられ少なからざる外交上の不利をかもしつつある。……伝うるところによれば、田中総理はある方面から、事件の真相を厳重に調査し、事件のいかんによっては公正なる処分を施し、もって国家国民の信用名誉を維持すべきことを警告せられ、これに聴従した結果がすなわち政府と軍部の抗争となり、村岡司令官、ならびに白川陸相辞職の風説を生むにいたったものであるとのことである。……しかし事態は決して政府内部における責任の擁護に委することを許さぬのはもちろん、その真相の調査をも、無限にこれを遅延し、司法権の発動問題をも決定することができず、わが国家国民の全体をして永くその嫌疑をわかたしめんとしておるようなことは、その忍ぶあたわざるところである」（「東京日日新聞」1929年4月3日）

こうした記事が散発で終わったのは、やはり田中のなすことすべてが後手後手で、優柔不断であったからだろう。今ならマスコミをいかに利用するかに腐心するはずだが、ことがことだけに田中もそこまで知恵を回さなかった。

伊東巳代治が「田中は愛すべき正直者」と形容したように、田中は無類のお人よしだった。「オラがオラが」と山口弁丸出しで愛嬌があり、国民的人気もそれなりにあった。しかし、伊東が「あ

したには自分の説を聞いたかと思えば、夕には他の言を入れて豹変する」と慨嘆したように、方針がしばしば揺れた。それは奉天総領事として田中に仕えた林久治郎も「宏量ではあるが、一定の見識を持たず変通自在」と田中を評している。

田中は中国通をもって自認し、自分なら何とかできると信じ込んでいた。しかしもはやカネと人情で動く時代ではなくなっていた。張学良を「オラが本当の息子のようなもの」と公言して、張作霖との親分子分関係を引き継がせようとしたが、どっこい張学良のほうがずっと視線が高かった。

田中は結局、得意と思っていた中国政策で自滅した。その意味で、田中は「時代の人」ではなかった。

第五話　軍縮にかこつけて兵器の近代化を図る

1. 飛行機事故による日本最初の犠牲者

1913年3月28日。時計は正午の少し前を指していた。

「おい、まだ見えんか!」

臨時軍用気球研究会の御用係、滋野清武男爵は観測台で東南の空をにらんでいる石本洋吉工兵大尉に向かって大声で叫んだ。

「まだ見えんです」

石本は双眼鏡をはずして、観測台の下にいる滋野に答えた。あまり強く双眼鏡を目に当てていたので、石本の目の周りに濃いあとがついて、まるで狸のような顔になっていた。

滋野は吹き出しそうになるのを必死にこらえた。それに笑っている場合ではなかった。飛行機隊と一緒に飛んでいたバルセバル飛行船が東京に着陸寸前に墜落したとの速報を受けたばかりだったので、滋野は気がきでなかった。

「臨時軍用気球研究会の名誉にかけても、これ以上の失態は許されない」

とも思った。

滋野は長州出身の陸軍中将、清彦男爵の跡取りで、父の意を継いで陸軍幼年学校に入った。しかし、もともと芸術家肌で軍教育にはなじめず、東京音楽学校に進み、さらにパリの音楽学校に進学した。ところが音楽ならぬ飛行機に魅せられて操縦技術を学び、日本人で初めて万国飛行免状（アエロ・クラブ）を取得した。日本の民間パイロット第1号である。帰国後は臨時軍用気球研究会の御用係として陸軍の飛行訓練教官を務めていた。

ついでにいうと、滋野の操縦技術は群の抜いていて、教え方もうまかったが、同じ教官の職業軍人のやっかみを買って嫌気をさし、再びフランスへ渡ってしまった。第一次世界大戦が始まると、フランスの外人部隊に大尉として入り、追撃部隊のコウノトリ飛行大隊の名パイロットとして敵機を何機も撃墜した。その功績でフランス政府からレジオン・ドヌール勲章とクロワ・ドゥ・ゲール勲章を授与されている。

「あっ、見えました!」

石本の叫びに、滋野も額に手を当てて空を見上げた。灰色の空に現れた黒点は、どんどん大きくなって薄黄色の機体に変わった。フランス製の単葉固定翼プロペラ機「ブレリオ」である。

「うん、戻ったか。あと1キロか、な」

機体が着陸すべく機首を左に切った、そのときである。突然に上空の気流が乱れ、突風が南から同機を襲った。と、あっという間もなく左翼の一部がもぎ取られバランスを崩すと、くるくると弧を描いて300メートル下の山林に頭から墜落した。

その間、わずか数秒。石本は絶叫した。

「松井村の牛沼付近に落ちました！すぐに救助に向かってください。早く、早く！」

石本は自ら駆け出したい気持ちだったが、あとの飛行機2機が無事戻るのか見届けなければならない。滋野は石本の叫びを聞くと、すぐに秘書に命じて格納庫から自分の小型自動車を引き出させ、飛行場の医務局に走った。ちょうど医務局では青木軍医が昼食を取っていた。滋野は青木を車に引きずり込んで現場に急行した。

この日、埼玉の所沢飛行場では臨時軍用気球研究会の主催で、飛行のデモンストレーションを行っていた。貴族院と衆議院のかねてからの希望によるもので、東京の青山練兵場まで飛んで、また戻る予定だった。

人間が空を飛ぶなど、まだ空想の域を出ていない時代だった。青山練兵場には朝早くから大勢の両院議員が家族と一緒に詰め掛けていた。北白川、久邇、朝香の三宮も見学に現れ、練兵場周辺は飛行機を一目見ようと群集が道路を埋め尽くしていた。

飛行は最新のブレリオ機を中心に徳川式2号と3号の3機を飛ばし、巨大なバルセバル飛行船も同行させた。徳川式とは、フランスの複葉機「アンリ・フォルマン」を日本で改良した飛行機で、最初に日本の空を飛行機でとんだ徳川好敏大尉にちなんで名づけられた。正式名称は臨時軍用気球研究会式（会式）である。

午前10時前、所沢を後にしたブレリオ機は快音を轟かせて怪鳥のごとく帝都東京の空に現れ、30分間の飛行を終えて練兵場に着陸した。操縦桿を握っていた木村鈴四郎中尉が万雷の拍手を浴びて地上に降り立った。

続いて徳川式3号機が急降下の妙技を披露しながら着陸、徳田金一中尉が操縦席から降りてきた。そして徳川式2号機が練兵所上空を1周するサービスをして着陸した。

最後に現れたバルセバル飛行船が着陸態勢に入ったとき、下げ舵を引きすぎたのか、みるみる急降下して青山葬場殿に落下した。飛行船のゴンドラが付近の電柱をなぎ倒し、電車架線を引きちぎったが、幸い付近に人影がなく、乗員4人も無事だった。

その20分後、飛行機3機は何事もなかったように所沢に向けて青山練兵場を飛び立った。ブレリオ機は木村中尉が操縦席に座り、往路に同乗していた阪本真彦少尉に代わって徳田中尉が隣に座った。阪本少尉に徳川式3号機を運転させるためだった。

実は木村中尉は1年前、墜落事故寸前の目にあっている。1912年の埼玉・川越の特別大演習のときで、このとき初めて飛行機が偵察用として動員された。木村の乗った徳川式3号機がエンジントラブルで220メートルの空中から急降下、木村の必死の操縦でなんとか麦畑に軟着した。危機を潜り抜けた木村の操縦術は「天才飛行士」として評判になり、明治天皇からお褒めの言葉をいただいたほどだった。今回も朝から霧が深く視界が必ずしも十分ではなかったが、「木村なら大丈夫」と、誰もが事故に会うなど考えもしなかった。

滋野が現場に駆けつけたときには、機体はばらばらに散り、二人はかばい合うようにしてエンジンに押しつぶされていた。機体から二人を引き出したものの、青木軍医が手を出しようもないほどに損傷が激しかった。木村の手には操縦桿の破片がしっかりと握られていた。飛行機による日本の最初の犠牲者だった。

「この二人　新しき世の死ぬ道を　教ふることす　誰か及ばん」

「大空を　路とせし君いちはやく　破滅を踏みぬ　かなしきかなや」

与謝野晶子が二人の殉職を悼んで、「東京朝日新聞」などによせた歌である。木村（27）は独身だったが、徳田（29）は三つと二つの子がおり、妻・菊枝子（22）は妊娠6ヶ月の身重だった。

日本人が操縦桿を握って日本の空を飛んだのは、ほんの2年余前の1910年12月19日のことだった。パイロットは徳川大尉である。飛行機は複葉機「アンリ・フォルマン」で、陸軍が大枚1万8800円をはたいてフランスから買ったものだった。

飛んだといっても、わずか4分間。70メートルほどの高さで、代々木練兵場（現代々木公園）の上空を1周1500メートルの弧を描いて2周しただけだった。それでも初めての日本人による飛行に軍部は大満足だった。陸軍はこれを偵察用に使うべく、高価な飛行機をさらに3機購入し、不十分な訓練のまま1912年の埼玉・川越の特別大演習に参加させた。これがうまくいったので、陸軍中枢はさらに翌年の演習でも、と欲張った。

上層部の決定に、陸軍省工兵課長の井上幾太郎大佐は不安で、心配でならなかった。参謀本部員時代から飛行機の効用を説き続けてきた井上だが、日本はまだまだ研究段階で実戦への応用は無理と考えていた。自前の飛行機を作り、飛行技術の向上に怠りない欧米列強でも、飛行機事故は頻繁に起きている。1910年には29人が、翌1911年には71人が命を落としているのだ。

なにしろ、日本軍部が航空戦力に取り組んだのは、たった4年前の1909年である。田中義一が陸軍省軍事課長のころで、陸海軍合同で立ち上げた「臨時軍用気球研究会」が最初だった。研究会の委員長は長岡外史陸軍中将が務め、井上も会員の一人として研究会に参加した。研究会は翌年、徳川大尉をフランスへ、日野熊蔵大尉をドイツへ飛行術の習得と飛行機購入を目的に送り出した。

しかし、研究会では当初、気球の実用化が中心課題で、飛行機は戦力にならないと関心が薄かった。たとえば陸軍技術審部長の有坂成章中将は「空中戦争における飛行機と飛行船」という論文を雑誌「科学世界」（1910年10月25日号）に発表して、こう述べている。

「飛行機は一所に長く停止することができず、また今日のところでは一人二人しか乗ることはできない。ゆえに詳細なる偵察および有力な戦闘を持つということは、飛行船に比べるとよほど困難といわねばならぬ」

飛行機に注目したのは海軍のほうだった。航空母艦の出現を予測して 1912 年、「海軍航空術研究委員会」を独自に成立させ、陸軍とは別行動をとった。それを横目で見ていた陸軍首脳は、遅れをとってはならぬと井上らにはっぱをかけた。井上の目からすれば、事故は起きるべくして、起きたのである。

陸軍にとって幸いだったことは、世論の袋叩きに会わずに済んだことだ。たとえば「東京日日新聞」の社説（3 月 29 日）は

「そもそも飛行機の将来は、ますます多事なるべしといえども、その進歩発達においては、われは遠く欧米列国に及ばず。わが飛行界は、両犠牲に対して、ますます奮励するところあるを疑わず」

と書いた。「読売新聞」の社説（3 月 30 日）も次のように述べている。

「国費窮乏の際といえども現在の数倍、あるいは十数倍した経費を飛行研究に投ずるのは易々たることであろう。空中征服の一大進歩を図らねばならぬ」

井上はこうした世論の後押しを得て、航空戦力の裾野を広げようと、官営ではなく民間における航空機産業の必要を訴えた。なぜなら官営では予算に縛られ何事も遅々として進まず、思い切った開発・増産が難しいと考えたからだ。

海軍でも同じように飛行機製造の民営化を夢見る若き海軍機関大尉がいた。彼は井上に共鳴してさっさと軍服を脱ぎ捨て、井上の協力を得てゼロから飛行機製作に取り組んだ。後に“日本の飛行機王”となった男、中島知久平である。

2. 蚕小屋を改造して飛行機作りを目指す

中島は 1894 年 1 月、群馬県新田郡尾島町に中堅農家の長男として生まれた。中島家は畑 3 町歩を持ち、養蚕や藍玉作りを手広くしていたというから、豪農とはいえないまでも恵まれた環境で育ったといえよう。父・粂吉は後に町議に選ばれ、町長にもなっている。しかし、弟 4 人と妹 2 人の大家族だったし、「百姓に学問はいらぬ」という祖母の反対で、中島は中学校への進学をあきらめなければならなかった。

中島は中学に進級した友達の教科書を借りて、野良仕事の合間にこつこつと勉強した。一度はあきらめたものの、中島の勉学の熱は冷めなかった。

「どうしても陸軍士官学校に入って将校になりたい」

中島は 16 歳の 1900 年 4 月、家には内緒で東京に出奔した。そのとき中島は茶の間の神棚にあった藍玉の売上金 110 円（現在の 110 万円相当）を黙って持ち出していた。

「定めしお困りになると思いますが、しばらくの間貸してください。おカネは何倍にしても必ずお返しします。親不孝をお許しください」

との置手紙を残して。

居所はやがて家族の知るところとなったが、両親は怒るどころか中島を励まし、その勉学を見守ってくれた。中島が2年後、中学卒業と同等の資格を持つ専門学校入学検定試験に合格すると、

「よく一心を通した」

といって、陸士に入るためのさらなる勉学の支援をしてくれた。

中島は結局、陸士の受験に失敗したが翌年の1903年、海軍機関学校に合格した。機関学校は海軍兵学校より1段下に置かれ、卒業しても艦船の司令官にはなれなかったし、最高位も中将までだった。しかし父・粂吉の強い勧めで、中島は入校を決意した。酒もタバコもやらず、まじめ一方の中島は同期44人中3番の成績で卒業し、海軍機関将校の道を歩んだ。

中島はライト兄弟の飛行成功に刺激され、在学中から飛行機に関心を持っていた。機関少尉に任官して軍艦に乗るようになり、艦艇に積まれた外国の雑誌に飛行機に関する記事を見つけては胸を躍らせた。すっかり飛行機熱に取り付かれた中島は中尉のとき、海軍大学校の選科生を願い出て、1年間の飛行機研究に没頭した。

「海軍航空術研究委員会」が発足すると、その委員となり、横須賀の海軍工廠に飛行機の修造工場が新設されると、その主任となった。海軍も中島の才能を認めて米国に派遣し、飛行機工場で組み立て整備技術を学ばせた。その際、中島は操縦のライセンスまで取って帰国している。

「欧米に比べて貧乏なわが帝国の防衛は、カネのかからない新兵器を基礎とした戦い方を見つけていかなければならない。戦艦1隻で飛行機が3000機できる」

以来、中島はたびたび航空戦力の整備・増強を上司に具申したが、大艦巨砲主義の伝統の強い上層部にはなかなか届かない。じれた中島は軍服を脱いでやるしかないと1917年、思い切って海軍を退官した。当時、中島は古参大尉で、少佐昇進を目前としていたが、位階にはさらさら興味がなかった。中島は郷里に戻り、翌年に隣町・太田町（現太田市）に「飛行機研究所」を設立した。

飛行機研究所といっても初めは蚕小屋を改造したみすぼらしいもので、仲間は弟を含めてたったの6人。後に神戸の豪商、川西清兵衛の出資を得たものの、なにかもかも裸一貫からの出発だった。無謀ともいえる中島の船出を助けたのは、海軍ではなく陸軍の井上幾太郎だった。

中島は井上と臨時軍用気球研究会で顔を合わせていたけれど、さほど親しかったわけではない。研究所設立の挨拶に訪れた中島の稀有壮大な理想に井上は深く共感を覚え、今後の支援を約束した。まずは陸軍が米国から購入したばかりの「120馬力ホールスコット」発動機2基を譲ってくれた。

中島はこれを使って夜を昼にして研究し、中島式飛行機を完成させた。しかし、結果は惨憺たるものだった。1号機、2号機とも離陸せず、やっと空中に浮いた3号機もすぐに墜落してしまった。世間は中島を揶揄してうたった。

「札（サツ）はだぶつく、おコメは上がる、なんでも上がる。上がらないのは中島飛行機」

しかし、中島はあきらめなかった。1919年2月。汗みどろ油まみれで完成させた4号機は、初飛行で悠々と大空に舞い、連続宙がえりを5回もしてみせ、見物客の歓声を浴びた。

その年の第1回郵便飛行競技大会で中島式4号機は東京・大阪間を3時間18分で飛び、見事優勝した。この成果を評価して、陸軍は同年、20機を中島に発注、翌年には陸軍が70機、海軍が30機を注文した。飛行機研究所は順調に離陸するかに見えた。

ところが経営方針をめぐって川西と衝突した。「より早く、より遠くに」と性能一途の中島に、儲け優先の川西が反対した。

「飛行機の性能を上げるには優秀な操縦士が必要不可欠」

と、その訓練のためにカネに糸目をつけない中島のやり方が危なっかしくて見ていられなかったのだ。話し合いは決裂し、川西は1920年、資本を引き上げてしまった。途方にくれた中島を助けたのは、またも井上である。井上は三井物産に持ちかけて資本提携を結ばせ、中島の危機を救った。

一方、川西は神戸に川西飛行機製作所を設立した。資本を引き上げるついでに技術者も引き抜いてきたので、仕事は難なく軌道に乗った。川西は、もっぱら飛行艇などで海軍の受注を受け、中島と覇を競うようになった。

中島も川西も数々の名機を生み出し、三菱、川崎、石川島などとともに日本の航空業界に君臨した。中島は日本の敗戦まで、なんと約3万の航空機を生産した。九七式戦闘機、一式戦闘機（隼）、四式戦闘機（疾風）、九〇式艦上戦闘機などである。あの三菱の設計した有名な零戦でさえ中島の発動機「栄」を使い、その3分の2は中島の工場で生産された。

中島はその後、地元群馬県から代議士となり、1年生議員ながら犬養内閣の商工政務次官を務めた。第一次近衛内閣では鉄道相に抜擢されている。さらに政友会分裂のときは一方の総裁に担がれもした。もっとも、中島の懐を狙って担がれたともいわれているが。

実際、政治家としての中島はこれといった足跡は残していない。むしろ対中国政策では軍部以上に過激的で

「あんなヤツがいるとは困ったものだ」

と陸相を嘆かせたほどだった。ただ、航空戦力に関しては、やはり天才的な先見の明を持っていた。たとえば太平洋戦争中に

「米国に勝つには大型爆撃機を作る以外にない」

と力説して、社運を度外視して「富嶽」の製作に奔走したことが特筆されるだろう。

ここで、井上と中島のエピソードを紹介しよう。時代はずっと下がって、中島が帝国議会に議席を得た翌年の1931年6月、物書きを職業としている知人が訪ねてきた。

「お世話になった井上閣下にお礼が済んでいない。なにしろ閣下はこれ（親指と人差し指で丸を作り）を絶対に受け取らないし、物も受け取ってくださらない」

すると知人はこう提案した。

「実は自分は井上大将の伝記を書こうと思っている。『航空界の恩人井上幾太郎』『軍人井上幾太郎』『人間井上幾太郎』の3部作だ。3万円くらい掛かるかもしれない」

「それはいい話だ。紙代と印刷代は別にして5万円を出そう」

知人はすぐに井上のところに飛んでいった。ところが井上は喜ぶどころか言下に拒絶した。
「わしは中島さんに私恩を施した覚えはない。中島さんは日本の国防の欠陥を救うために挺身された立派な愛国者であって、最もまじめな飛行機製作者だ。わしはそういう人の進出を待望していたときに中島さんが現れたので、喜んで軍航空のために協力してもらったのだ。おかげで陸軍でも海軍でも大助かりしている。だからこちらのほうでお礼をいいたいと思っているくらいだ」

井上はやがて初代航空部本部長を務め、大将になって1933年、予備役に編入された。三菱などが顧問に迎えようとし、中島も好条件を出して運動した。しかし、井上はどこにも天下らなかった。井上は修養団体「乃木講」の代表をボランティアで引き受け、1937年、帝国在郷軍人会の最後の会長となった。

3. 航空戦力“育ての親”井上と田中陸相

第一次世界大戦は、それまでの戦争観を一変させた。飛行機、戦車、毒ガスなど新しい兵器が次々登場し、戦略・戦術ともに根底からの練り直しを迫られた。いつ果てるともわからない長期消耗戦は、国民の総動員体制を必然のものとさせた。

ところが当時の陸軍上層部は、依然として常設の師団増強に拘泥して、軍備の近代化は二の次におかれた。もちろん、口では兵器の「科学化」は唱えられたが、「まずは常備軍の増強」が優先で、新兵器の開発には、ほとんど予算が回らなかった。このため機関銃の増配や大口榴弾砲の配備も遅々として進まず、当時の「時事新報」記者、伊藤正徳は
「日本の陸軍は世界の三流以下に成り下がった」
と嘆いた。伊藤はときの空気を、こんな風に伝えている。

タンク（戦車）が第一次世界大戦の戦場に始めて登場した1916年9月のこと。「新兵器現れる」の外電を受けた日本の新聞社は、それが何のことかさっぱりわからない。「タンク」といえば「ガスタンク」しか知らないのだから無理もない。あわてて記者たちが陸軍省に駆けつけ説明を乞うたが、将校たちもどんな兵器なのか誰一人としてわからない。そこで新聞社は横文字をカタカナに直して「タンク」として記載するほかなかった。

「毒ガス」「火炎放射器」「バズーカ砲」「高射砲」「装甲車」と、次々と新兵器が出現して、陸軍省は現地に問い合わせるのにおおわらわだった。それほどまでに日本の軍事知識は遅れていたのである。そうした頑迷な陸軍幹部のなかで
「これではいかん」
といち早く気づいたのは田中義一だった。

そのためになにをすべきか。田中はそれまでの師団増設の旗振りをやめ、その代わりに予算を新兵器開発に振り向けようとした。身を切ってこそ浮かばれる、と決断したのである。軍国日本を作り上げるうえで、田中の“功績”の一つは軍備の近代化の先鞭をつけたことであろう。

田中が原敬内閣の陸相に就任した当時、軍部に対する国民の風当たりはきわめて厳しかった。第

一次世界大戦もようやく収束し、誰もが平和を希求していた。民力の涵養、産業の振興こそ国民の、経済界の欲するところだった。にもかかわらず日本の軍事費は膨張を続け、なんと国家予算の半分に迫ろうとしていた。当然に世論は軍事費の削減を求めた。

ところが陸軍は平時 25 師団を、海軍は八八艦隊の完成を目指して、さらなる予算増加を要求し、一歩もひかない強硬姿勢を堅持していた。原内閣は発足当初から世論と軍部の挟み撃ちにあった。

原の意を受けた高橋是清蔵相は加藤友三郎海相、田中陸相と膝詰め談判した。

「両省の計画を実現するためには、大幅な増税をしなければならない。とても世論は許すまい。総理は少なくとも来年度は増税しない方針だ。まず、両省はできる限りの整理を行って欲しい」

蔵相のたっての要請で、両相ともそれなりに努力したが、それでも大幅に予算枠を超過した。高橋蔵相は再度、陸海両相を呼び懇請した。

「陸海軍とも大きな計画を立てているが、緩急計量はありえないのか。あるいはどちらかを先にして、どちらかを後にすることはどうか。軍部大臣としてではなく、国務大臣として考えて欲しい」

加藤海相は聞いているのか聞いていないのか、黙って腕組みをしていた。加藤も高橋の苦境がわからないではないが、下手に返事をすれば部下の突き上げは必至だ。重苦しい沈黙が続いて、高橋がさじを投げかけたところで田中が口を開いた。

「それは海軍が先じゃよ。海軍は軍艦の艦齢があるから、この艦齢を念頭において国防計画を立てる必要がある」

この発言に瞠目して、加藤はまじまじと田中を見た。高橋もびっくりした。すかさず田中は言葉を続けた。

「蔵相の話はよくわかった。海軍の計画が完成するまで陸軍は待とう。陸軍はそれまでは必要やむを得ざるものにとどめるが、海軍が完成したら陸軍の計画遂行を約束していただきたい」

三相会議は急転直下に解決して予算案は無事、閣議を通過した。収まらないのは陸軍内部の不満である。田中の力が絶頂期だったので表立って反対する空気は抑制されたが、師団増設を凍結された不満はやがて反田中勢力の中核を形成していく。

田中の“譲歩”を、海軍に負けたと批判する声は政界にもあった。岡山県選出代議士の福井三郎は予算が閣議を通過した直後、原を訪れて苦言を呈した。

「田中陸相は閣議で予算を削られて弱腰だとの批判が党内にありますが」

「（ちょっと笑って）それは僕の耳にも入っているが、つまらぬことだよ」

「（むっとして）つまらぬことでもないでしょう」

「各省が要求した予算がそのまま通せるなら、閣議はいらないではないか。田中陸相は国家財政の大局から各省との関係を考え、国防軍備の前途を達観して忍びうる限度において減額に応じたのである。第一、陸軍省に戻り省議にかけて、誰一人文句を言わせぬではないか。誰が代わってそのまねができるかね」

福井は渋々その場は引き下がったが、軍部におもねて田中を批判する空気は他の政党にもあった。

しかし、田中は“ええかっこ”して、海軍に譲ったのでは決してなかった。田中は考えた。

「軍縮ムードの中では、たとえ予算案に軍拡を盛り込んでも議会でそのまま通る保障はない。師団増設といったような旧来の軍拡に固執するのは愚策だ。ここは新時代に応じた軍備の研究を急いで、適当な時期に本格的な軍備充実を図ったほうがよい」

現状の21個師団を維持するだけで年間1億円以上かかる。世界情勢は確かに混沌としているが、仮想敵国のソ連もまだ揺籃状態で、いますぐ4個師団増設をしなければならぬわけでもない。むしろ火力や兵器の改良のほうが緊急課題だ。なかでも田中が熱心に取り組んだのが航空戦力の強化だった。

そのことはすでに原とも意見の刷り合わせをしてあった。実際、田中は翌1919年度予算では航空部を設置して航空課を新設し、所沢に航空学校を、さらには工兵学校を作ることに成功した。航空中隊も増設した。翌年には航空部は航空局に格上げされ、航空学校の分校も下志津に作られた。航空中隊は大隊を編成するまでに増強された。

もちろんこれらのアイデアを出し、企画立案したのは田中ではない。当時の陸軍運輸部本部長の井上幾太郎少将がすべてを取り仕切っていた。しかし、井上の独断専行を許し、カネもヒトも要求どおり認めた田中陸相あっての実現だった。

田中が陸相に就いたとき、実は日本の航空戦力は欧米から格段の差をつけられ、まさに三流以下だった。飛行機の機数ばかりでなく、型式も古く、整備技術も拙劣だった。第一次世界大戦の影響で飛行機部品の輸入が止まり、操縦士の錬度もまったくといっていいほど進歩していなかった。中島式飛行機などが実用として現れるのはそれから後のことである。

田中は井上が飛行機に詳しいことを知っていたので、すぐに井上を大臣室に呼んだ。井上は田中と同じ長州出身で、1872年2月生まれ。陸士を出てすぐに日清戦争に従軍、陸大卒業後は日露戦争に第3軍参謀として出征した。戦後はドイツに駐在した後、参謀本部員、工兵課長、軍事課長を経て1916年に少将に進級し陸軍運輸部本部長を務めていた。

「欧米に比べて我が帝国空軍の劣勢はなんともしがたい。何かよいアイデアはないか」

井上は自嘲気味に答えた。

「ヒトがない、カネがない、制度がない。この3つの原因で時代に後れをとっているのです。上からいくら督促しても、進歩するはずがないではないですか」

「では君、ひとつこれをやってくれんか」

「とやかく横槍を入れず、ヒトとカネを惜しまないお覚悟があるならば、お引き受けしましょう」

「貴様のいうとおりにしてやろう。遠慮なくやれ」

実際、田中は井上の具申をすべて丸呑みした。

なかでも田中の英断は、1919年1月に飛行士の技術向上のためにフランスから飛び切り大きな航空技術団を招聘したことであろう。フランス帰りの酒井鎬治郎大尉の進言によるもので、井上がその後押しをした。この航空技術団はジャック・ポール・フォール砲兵大佐以下約60名の大訪問

団で、当初は教わる陸軍将校よりも指導にあたるフランス将校のほうが多いという贅沢な技術団だった。

このため「贅沢すぎる。予算の無駄遣いだ」との声が軍部の方々から出てきた。しかし、田中は井上の希望を受け入れて反対意見を封じた。第一次世界大戦を戦ったパイロットが三方ヶ原や各務原、下志津、新居で航法・戦法を教え、えり抜きの設計技術者が熱田の兵器廠で発動機製作を教えた。技術団が1年間かけて手取り足取り教えてくれたことは、その後の日本の飛行技術と航空機産業の発展の基盤となった。

田中は同年、陸相直属として航空部を新設して、本部長に井上を据えた。井上はこう述懐している。「およそ物事の創始期には、多少の弊害があるにせよ独断万進しなければ基礎が固まらない。当時航空に関することは陸相と私との間で一切を決定し、他に容喙せしめなかった。陸相が私を信じ容れられたことは、空軍自体にとっても幸せであった」

4. 日本の運命の転機を作った宇垣軍縮

軍縮にかこつけた軍近代化は、原敬内閣で田中の後の陸相となった山梨半造と、田中の強い推薦で清浦奎吾内閣の陸相に就いた宇垣一成の二人によって推進された。この二人は、田中の引きで陸軍の出世階段を上り、また田中の考えをよく受け継いでいた。

なかでも宇垣の軍縮兼近代化は、4個師団を廃止してその見返りとして遂行するという思い切った施策だった。このため宇垣は軍内部から強い反感を買い、後に昭和天皇から組閣の大命を受けながら、陸軍の反対で辞退に追い込まれる悲運に見舞われることになる。

まず山梨軍縮に触れておこう。

狭心症で原内閣の陸相を下りた田中は、腹心の山梨を次官から昇格させて陸相に据えた。原が暗殺された後、高橋内閣が生まれ、続いて加藤友三郎海軍大将が組閣するが、山梨は引き続き陸相にとどまった。その加藤内閣の下で、山梨は1922年7月と翌年4月の2回にわたって軍の整理を行った。

当時の財政は、第一次世界大戦後の戦後恐慌からようやく立ち直ったとはいえ慢性的な税収不足で、歳出削減は必定だった。財政膨張の最大原因は軍事費にあったので、批判の目は必然的に軍部に向けられた。

軍縮はすでに海軍から始まっていた。列強間で海軍の主力艦削減を決めたワシントン軍縮条約が調印され、日本は戦艦20隻の破棄または建造中止に踏み切った。この結果、海軍は1923年度予算で4600万円の節約を達成し、将兵7500人の整理と、1万4000人の職工が解雇された。

ワシントン軍縮条約が調印された少し前の1922年2月1日、陸軍の大御所、山県有朋が83歳で亡くなった。山県の力は陸軍だけでなく官界全体に及んでいたので、議会も山県を慮って思うようには行動が取れなかった。その死で陸軍からの重石が取れると、議会では軍縮論議が活発になった。1922年3月の衆院本会議では、各党派一致で軍縮決議案が可決された。当然のように批判の矢は陸軍に放たれ、予算の整理・削減が求められた。

「逆境は天佑じゃ。軍の整理で近代化に取り組め」
との田中の忠告に従って、山梨は1922年7月、「5個師団分の節減」との鳴り物入りで軍縮案を公表した。

歩兵連隊の編成を12中隊から3中隊減らして9中隊とする。騎兵連隊の3個中隊を2個中隊に削減する。野砲および山砲の7連隊と重砲兵1大隊を野砲・重砲連隊2と騎砲大隊1に再編する。その代わり、機関銃隊を各歩兵と騎兵の連隊に新設する。新たに飛行大隊2を新設する――などとなっている。山梨は
「2000人の将校を含む約6万の将兵と馬1万頭を整理した。これによって2200万円の節約になる」
と喧伝した。しかし、実際は常設の師団そのものにはまったく手が触れられず、むしろ節税は機関銃、野戦重砲、航空機などの兵器の近代化に食われてしまった。その経費はざっと9000万円で、実態は田中の指南どおりの軍縮と見せかけた軍近代化だった。
「師団数をそのままにしての兵員の減少は陸軍の夏痩せに過ぎない」(「読売新聞」1922年8月22日)
と世論は厳しく批判した。

山梨は1923年4月に第二次軍縮案を発表した。鉄道材料廠、軍楽隊の一部、二つの独立守備隊、仙台幼年学校などを廃止し、父島、奄美大島に要塞司令部を設置する――といったものだが、果たして軍縮といえる代物だったかは疑問である。

しかし、その実効性はともあれ、山梨軍縮が世間に与えた影響は少なくない。
「平和だ、平和だ。もう軍人は必要ない」
との極端な軍人蔑視が広がり、新聞に面白おかしく紹介された。たとえば「報知新聞」(1922年7月11日)では
「10年前までは尊敬を受けて大威張りだった軍人はいまや一種の寄生虫のように見られるようになりました」
との投書が見られる。「読売新聞」(同年9月9日)の投書にも
「士官学校の生徒が逃げ出したという話があった。海軍兵学校の生徒が職業安定所で就職口を求めたという記事があった。軍縮のたたりである」
とある。軍人は電車に乗るのも軍服は気が引け、人ごみの中では平服を着るようにした。名のある女学校の卒業生は、軍人には嫁に行かないと公言するようになった。若き将校たちが
「今に見ていろ!」
と切歯扼腕し、その反動が昭和になって噴出する。軍縮はたとえ実態がどうであれ「軍最大の敵」で、そのためか山梨とその背後にいる田中は若手将校から人気を失った。

さて、山梨軍縮と違って宇垣の行った軍縮は、師団増設を基本方針としてきた陸軍のこれまでの政策を180度転回させる思い切った軍縮案だった。そうせざるを得なかったのは、関東大震災後の復興財源捻出のため、加藤高明首相は各省例外なく行政整理を求めたからである。なかでも海軍には5000万円の、陸軍には3000万円の予算削減を要請した。

宇垣は清浦内閣発足の際、田中が策略を弄して無理やり陸相に押し込んだ。しかし、知力・胆力ともに優れた逸材で、清浦内閣が倒れた後も、第一次、第二次加藤高明内閣、第一次若槻礼次郎内閣の陸相を続けた。

若槻の後を襲って組閣した政友会の田中も宇垣の留任を希望したが、宇垣は健康を理由に断った。政友会のライバル憲政会の内閣と深くかかわってきたからでもあるが、本音は金権のにおいを立ちこめた田中と距離を置きたかったからである。また、彼なりの独自路線を陸軍に敷く自信もあった。実際、田中内閣が倒れたあと、浜口雄幸が組閣すると、再び陸相に就任している。

宇垣は1868年に岡山県瀬戸町に生まれた。1890年に陸軍士官学校を、1900年には陸大を出ている。陸士の同期には白川義則、鈴木荘六らがいる。長州閥ではなかったが、田中にはなにかと目をかけられ、陸軍省軍事課長、参謀本部第1部長に抜擢された。第二次山本権兵衛内閣の田中陸相の下で次官も務めた。

宇垣軍縮は1925年5月に発表された。その要諦は次の3点に集約される。第一に、21個師団体制から4個師団を廃止して17師団とする。第二に、学校軍事教練を創設し、全国に青年訓練所を作る。第三に、科学兵科を拡充し、軍の近代化を図る。

第二、第三は、第一の4師団廃止が成就してはじめて可能となる。師団廃止は海軍でいえば主力艦4隻を沈めるようなものだ。陸軍は上から下まで、ほとんどが反対だった。軍人だけではない。師団のあることで地域経済が潤っていた地元住民も抵抗した。

宇垣にとって最大の難関は、陸軍最高機関の軍事参議官会議だった。上原勇作元帥以下、福田雅太郎、尾野実信、町田経宇ら各大将が強行に反対した。田中義一がいくらとりなしても聞く耳を持たない。宇垣は軍長老で会議議長の奥保鞏元帥をかき口説いて理解を得、田中、山梨、大庭二郎の各大将と自身の賛成で辛くも乗り切った。

廃止したのは第13師団（高田）、第15師団（豊橋）、第17師団（岡山）、第18師団（久留米）の4師団である。これにともない、16の連隊区司令部と5つの陸軍病院、2つの幼年学校を廃止した。師団を廃止した地域にはぺんぺん草が生えないように、よそから連隊や大隊を持ってきて埋めた。これによって3万4000人の将兵と6000頭の馬を整理した。合わせて願い出のあった田中を含む5人の大将と石光真臣ら7人の中将を予備役に編入した。この結果、1925年度予算で1295万円の節減になった。

その代わり宇垣は同年度から8年間の新規軍備拡充計画を立案、1億4000余万円を投じて火力・航空戦力を増強させるとした。また、学校に現役将校を派遣する学校軍事教練制度を新設した。さらには中学に進学しない若者を軍事訓練する目的で、全国1万4000ヶ所に青年訓練所を作った。

宇垣の軍縮は、まさに軍近代化のためで、これによって陸軍はようやく欧米の水準に近づいた。航空隊2個連隊が新設され、陸の荒鷲は本格的に大空を舞うようになった。戦車大隊の装備も改良され、高射砲隊、装甲車隊も次々と作られ、曲がりなりにも機械化部隊の態勢が整った。通信学校や自動車学校も新設して軍事技術の高度化を図った。陸軍の「科学化」は、宇垣の英断をもって着

手できた。

しかし師団を廃止された高級将校の怨念は、陸軍の中にその後長く亡霊となってさまよい続けた。なぜなら連隊旗は大元帥の天皇から賜った神聖なものである。その連隊旗16を天皇にお返ししなければならなかった各連隊長たちの慟哭は計り知れないものがある。その慟哭は遺恨となって、その後の宇垣にとりつくことになる。

それはさておき、宇垣は軍近代化とともに、田中の手がけた国家総動員体制も仕上げていく。大学以下、中学校までの学校に軍事教練を導入したことがそれである。宇垣は将来の大動員に備えて、前線の幹部となり、あるいは銃後の中堅となる学生層に軍事思想を叩き込んで国防意識の底上げを図ろうとした。師団廃止で職場を失った青年将校の再就職の道を築くためであったことはいうまでもない。

「平和な時代に。時代錯誤もはなはだしい」

と世論は反発したが、加藤内閣は宇垣の真摯な軍縮努力を評価して、これを呑んだ。

「軍隊の国民化、国民の軍隊化」

が口癖の宇垣は、陸軍を常備兵体制から戦時動員体制に切り替えていったのである。